

福岡市

# 板付遺跡 調査概報

(板付周辺遺跡調査報告書(5) 1977~8年度)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集

1 9 7 9

福岡市教育委員会

福岡市  
**板付遺跡** 調査概報

(板付周辺遺跡調査報告書(5) 1977~8年度)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集

1 9 7 9

福岡市教育委員会

## 序 文

近年、土地開発事業による埋蔵文化財の調査が、後をたたない状態です。我々の祖先が残した貴重な文化財は、子孫に継承していかねばなりませんが、現実では、開発の要請と保護との調整が極めて困難であります。

板付遺跡はその一部を国の指定史跡として保存していますが、周辺部に宅地造成が相次ぎ毎年、国庫補助事業で調査を実施しております。

今年度の調査では、日本の稻作の起源について重要な成果をあげることができました。これも地元作業員はじめ、多くの人達の埋蔵文化財への深いご理解とご協力によるものであり、深甚の敬意を表するものであります。

本書が、市民各位の文化財保護思想の育成に活用されますと共に、学術研究の分野において、役立つことを願うものであります。

昭和54年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 戸 田 成 一



# 板付遺跡調査概報

## 本文目次

第1章 序説	1
1. 調査の経過と調査地区	1
2. 露天体制	3
第2章 各調査区の概要	5
1. E-9 a 調査区	5
2. E-9 b 調査区	5
3. I-11 調査区	7
4. F-8 b 調査区	8
5. F-5 a 調査区	12
6. F-5 b 調査区	17
7. F-5 c 調査区	19
8. F-6 a 調査区	23
9. F-6 b 調査区	27
10. F-7 a 調査区	31
11. F-7 b 調査区	34
12. F-7 c 調査区	36
13. F-7 d 調査区	38
14. G-7 a・b 調査区	40
第3章 まとめ	52

## 挿図目次

Fig. 1 板付遺跡の地形と各調査区	2
Fig. 2 E-9 b 調査区全景	6
Fig. 3 第2号竪穴断面	6
Fig. 4 第1号竪穴遺物出土状況	6
Fig. 5 I-11 調査区の位置	7
Fig. 6 I-11 調査区全景	8

Fig. 7 F - 8 b 調査区の位置	8
Fig. 8 F - 8 b 調査区全景	9
Fig. 9 第3号竪穴遺物出土状況	9
Fig.10 出土石器実測図	10
Fig.11 出土土製品実測図	10
Fig.12 F - 5 a・b・c調査区の位置	11
Fig.13 F - 5 a の調査区	12
Fig.14 第2号竪穴と遺物出土状況	13
Fig.15 第2号竪穴出土土器	13
Fig.16 井戸とその出土遺物	15
Fig.17 中世溝と第1号竪穴	16
Fig.18 中世溝断面	16
Fig.19 F - 5b調査区全景	17
Fig.20 中世の井戸	17
Fig.21 . 22 遺物出土状況	18
Fig.23 F - 5 c 調査区	19
Fig.24 第4号竪穴	20
Fig.25 第4号竪穴遺物出土状況	20
Fig.26 第4号竪穴出土土器実測図	21
Fig.27 F - 6 a・b 7 a～d G - 7 a・b 調査区の位置	22
Fig.28 F - 6 a 調査区全景（上、遺構確認、下、発掘後）	23
Fig.29 遺構配置図	24
Fig.30 第12号竪穴実測図	25
Fig.31 勾玉実測図	26
Fig.32 青磁実測図	26
Fig.33 F - 6 b 調査区井戸断面	27
Fig.34 井戸（発掘後）	28
Fig.35 井戸実測図	29
Fig.36 井戸出土土器実測図	30
Fig.37 F - 7 a 調査区全景	31
Fig.38 1号地下式横穴	32
Fig.39 2号地下式横穴	32
Fig.40 第1号竪穴断面	33
Fig.41 F - 7 b 調査区全景	34
Fig.42 1号井戸実測図	35
Fig.43 1号井戸遺物出土状況（上、上段遺物、中、中段遺物、下、底遺物）	35

Fig.44 F - 7 c 調査区全景	36
Fig.45 住居址と出土遺物	37
Fig.46 F - 7 d 調査区全景	38
Fig.47 遺構配図	38
Fig.48 F - 7 d 調査区出土遺物	39
Fig.49 板付 1 式期水田実測図	41
Fig.50 板付 1 式期水田面（下）に残った足跡	42
Fig.51 板付 1 式期取排水口（東より）	42
Fig.52 板付 1 式期取排水口（西より）	42
Fig.53 足跡石膏型	43
Fig.54 夜臼式期水田実測図	44
Fig.55 夜臼式期取排水口（上、西より、下、東より）	45
Fig.56 G - 7 a 調査区断面	46
Fig.57 夜臼式期水田出土石器	46
Fig.58 各層出土の土器	47
Fig.59 G - 7 a 調査区全景	48
Fig.60 G - 7 b 調査区全景（弥生期）	48
Fig.61 G - 7 b 調査区全景（夜臼期）	48
Fig.62 G - 7 b 調査区木器出土状況（南より）	49
Fig.63 G - 7 b 調査区木器出土状況（北より）	49
Fig.64 夜臼式土器出土状況	49
Fig.65 G - 7 a + b 県道区の夜臼式期の水田遺構の関連	50

## 例　　言

1. 本報告書は、福岡市教育委員会が国庫補助を受けて、昭和52、53年度に実施した福岡市博多区板付およびその周辺の民間宅地造成に伴う緊急調査の概報である。
2. 本書の執筆には、山崎純男、沢 皇臣、山口譲治、原俊一があたり、各分担は文末に記した。
3. 本書に使用した図、写真の作成、撮影には、山崎、沢、山口、横山、前田、原があたり、製図には前田、木下の協力を得た。
4. 本書には科学的調査の成果は収録していないが、現在、依頼中である。本報告において収録する予定である。
5. 本書の編集は山崎がおこなった。



## 第1章 序 説

## 1. 調査の経過と調査地区

板付遺跡およびその周辺の遺跡については1973年以来、民間の宅地造成や住宅建設に伴う遺跡破壊については、国庫補助を受けて緊急調査を実施してきている。1977・1978年度の調査地区は、史跡指定地内からの移転に伴う住宅建設が多く、遺跡保存のための処置が指定地以外の遺跡を破壊するという矛盾した現象を生じてきている。1977・1978年度の調査地区は次の通りである。

## 1977年度調査分

1. 板付2丁目12-15	藤島紀元氏所有地	150.79m <sup>2</sup>	F-5d
2. 板付5丁目3-26	中牟田勝昌氏所有地	450m <sup>2</sup>	F-7d,b,c
3. 板付2丁目12-19,20,27	萩林平雄氏所有地	140.76m <sup>2</sup>	F-5b
4. 板付5丁目7-18~20	世利昌子氏所有地	214.34m <sup>2</sup>	F-5b

## 1978年度調査分

1. 板付5丁目3-4	中牟田勝昌氏所有地	327m <sup>2</sup>	F-7b
2. 板付5丁目3-26	中牟田勝昌氏所有地	100m <sup>2</sup>	F-7c
3. 板付2丁目12-10外	山浦盛雄氏所有地	554m <sup>2</sup>	F-5c
4. 板付5丁目2-1外	中牟田久人氏所有地	464m <sup>2</sup>	F-5d, G-7b
5. 板付5丁目2-2外	中牟田久人氏所有地	1,410m <sup>2</sup>	I-5d, G-7a
6. 板付5丁目3-14外	小西利一氏所有地	328m <sup>2</sup>	F-6b
7. 板付2丁目12-54外	山口經則氏所有地	557.27m <sup>2</sup>	F-5b
8. 板付5丁目7-89	齊藤久太氏所有地	198.99m <sup>2</sup>	E-9a

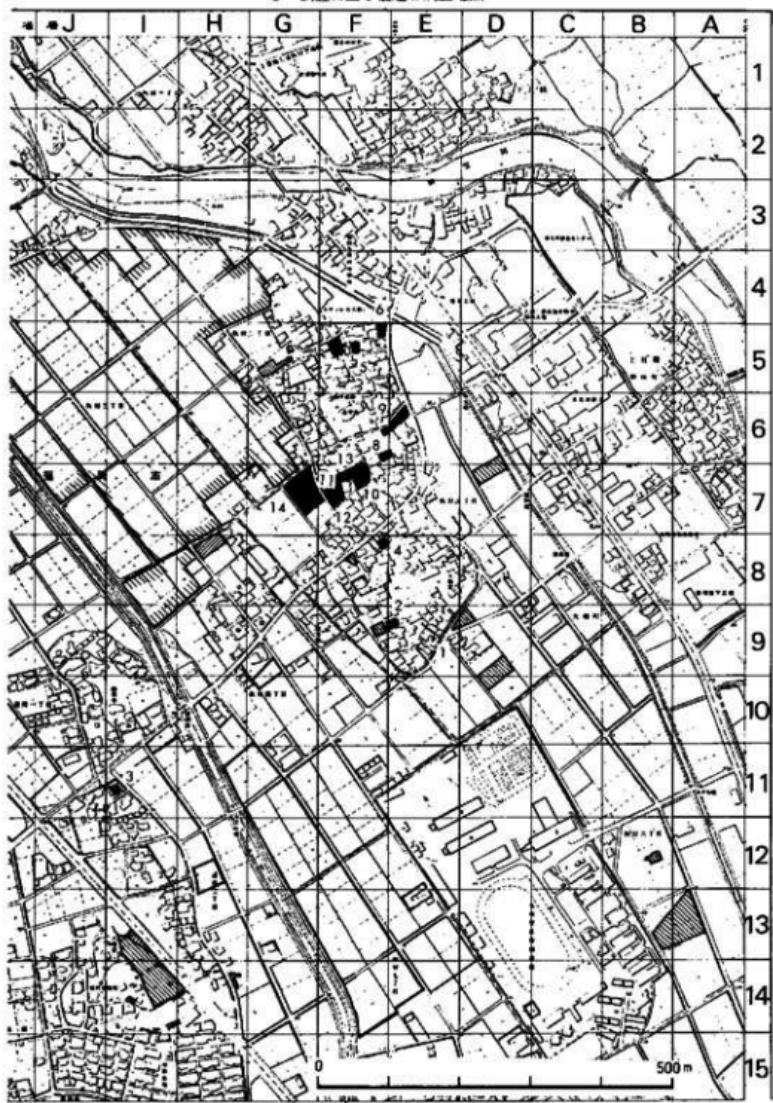
板付遺跡は、御笠川と諸岡川にはさまれた低丘陵と沖積低地を含む広範な地域に広がっている。低丘陵は頂部が二つあり、北側の頂部一帯を北台地、南側の頂部一帯を南台地とよぶことにする。沖積低地には水田遺構が広がっているが、まだ板付遺跡の正確な範囲は把握していない。

堀溝および水田址の一部の国指定史跡は北台地の頂部から西側の水田地帯である。1977, 1978年の調査はこの指定地の周辺に集中し、一部南台地において実施した。

調査成果は、昭和26年の日本考古学協会以来の成果を追認するものであったが、新たな知見も多かった。以下、各調査区の遺構を外記すると次のようになる。

E-9a調査区 時期不明の柱穴状ピット

1 調査に至る経過と調査地点



1. E-9 a 2. E-9 b 3. I-11 4. F-8 b 5. F-5 a 6. F-5 b 7. F-5 c  
8. F-6 a 9. F-6 b 10. F-7 a 11. F-7 b 12. F-7 d 13. F-7 c 14. G-7 a, b  
の各調査区

Fig. 1 板付遺跡の地形と各調査区

## 第1章 序説

- E - 9 b 調査区 袋状堅穴2基、不明土塙1基（地下式横穴？）溝1条
- I - 11 調査区 建物1棟（2間×3間）、溝1条
- F - 8 b 調査区 溝2条、堅穴4基、井戸1基
- F - 5 a 調査区 袋状堅穴3基、井戸1基、不明土塙1基、ピット多数、溝1条
- F - 5 b 調査区 溝1条、不明土塙1基、ピット、井戸1基
- F - 5 c 調査区 井戸3基、堅穴3基、溝2条
- F - 6 a 調査区 袋状堅穴13基、堅穴6基、ピット多数、地下式横穴1基、中世土塙1基・井戸1基、防空壕2基
- F - 6 b 調査区 井戸1基
- F - 7 a 調査区 袋状堅穴2基、地下式横穴2基、防空壕1基、不明土塙2基
- F - 7 b 調査区 井戸4基、ピット多数、廻物1棟、土塙1基、不明堅穴1基
- F - 7 c 調査区 袋状堅穴2基、住居址1軒、井戸2基、近世甕棺5基、不明土塙1基
- F - 7 d 調査区 井戸1基、溝
- G - 7 a 調査区 水出址、取排水口2、水路、小川、溝1条
- G - 7 b 調査区 水出址、水路、小川、井堀1、取排水口1

## 2. 調査体制

調査地区 福岡市博多区板付および龍岡

調査期日 1977年5月11日～1979年1月20日

調査主体 福岡市教育委員会文化部文化課板付遺跡調査事務所

調査関係者

調査指導委員

岡崎 敏（九州大学教授）  
横山 浩一（九州大学教授）  
森貞次郎（九州産業大学教授）  
三島 格（福岡市文化財専門員）  
藤井 功（福岡県文化課長）  
下條信行（九州大学助手）  
後藤 靖（福岡市歴史資料館）

福岡市教育委員会  
教育長 戸田成一  
文化部長 志籠幸弘  
文化課長 清水義彦（前任）  
文化課長 井上剛紀

## 2 調査体制

板付遺跡調査事務所長 橋崎幸利  
 廉務・会計 安田正義 河鍋好輝  
 発掘調査 52年度(文化課技師)  
     山崎純男 沢 皇臣  
     山口謙治 横山邦雄  
     53年度(文化課技師)  
     山崎純男 沢 皇臣  
     山口謙治

## 調査補助員

原俊一	前田義人	奈良崎和典	森瀬圭子
小野由美子	村上順子	伊崎俊秋	木下尚子
田口真理	久保智康	山田成洋	市橋重也
松永幸男	谷豊信	為貞由紀	連水信也
出利葉浩司			

## 作業員

屋山利久	含川キチエ	江嶋光子	安高久子
木村良子	大部茂久	金堂和雄	戸和田ミツル
糸山政雄	中牟田顕勲	谷フジエ	瀬河孝子
宿久光枝	勝野美智子	永松伊都子	勝野ミサ子
小林文子	糸山ミトシ	松風満	庭岡幸恵子
白土義実	森邦雄	横尾孝子	吉永智子
白石敏則	其真二	河鍋昭子	徳永智子
谷利彦	坂本浩	瀬戸信子	池田昭子
米嶋久雄	寺崎幸子	津村信子	山岡久子
糸山真澄	井上訓寿	山之内悦子	岡田光子
入佐正典	河部典広	川副昌子	東山光一
稻村英二	松尾園努	坂田圭一	田村一徳
中川浩	上園努	坂田一	津川武
河鍋光子	末永昌子	原賢治	川原千代
岡部鉄也	山村スミ子	政裕介	倉石浩
片山重明	伊藤良子	宮元芳子	橋千恵子

## 第2章 各調査区の概要

### 1. E-9a調査区

本調査区は、板付5丁目7-89に所在する。住宅改築に伴い緊急調査を実施した。板付南台地に立地し、弥生時代前期の袋状竪穴4基を調査したF-9a調査区の南東約60m、同時期と思われる木棺墓（木質の一部が残存しており、材質はクスノキ属）や古墳時代の祭祀ビットを検出したD-E-9調査区の西南西約80mにあたる。現地表面の標高は10.7m内外である。

調査区が限られていたために $2 \times 3$ mのトレンチを設定し、これを調査することにした。古くから住宅地となっていたためか擾乱が激しく、トレンチ東側には旧宅の基礎に利用したと思われる幅40cm、長さ2m程の石があり、その下の土層はいわゆる版築の状態を示していた。地表より約70cm、標高約10mのあたりで基盤層である鳥栖ローム層があらわれる。このローム層もかなり削平されており、遺構としては10数個の柱穴状ビットが存在したのみである。これらのビットの時期は不明。遺物としてはビット内より弥生式土器や土師器の細片が出土したが、ビットの時期を示すものではない。上部の擾乱層からは近世と思われる陶磁器や弥生式土器、土師器、須恵器などの細片が出土したが、図示できるものはない。

以上、本調査区は調査区の制約もあり、満足な結果は得られなかつたが、削平を受けているとはいえ、この地が台地上であり、時期不明の柱穴状ビットながら遺構の存在も確認され、ある程度の広さの発掘調査を実施すれば、良好な遺構の残存も期待できよう。(沢 朝臣)

### 2. E-9b調査区

本調査区は板付南台地の南西斜面、頂部よりやや下った地点に立地し、上記のE-9a調査区の西に位置する。また、1974年度調査のF-9a調査区に隣接する。調査は発掘区の周囲に人家が建ち込んでいるので、14m×7~5mの小範囲にとどめざるを得なかつた。

発掘区の層序は、耕作土、近世の擾乱層、地山である鳥栖ローム層となり、地山面に遺構がかろうじて残存している状態で、この地域が後世にかなり削平されたことが知られる。

検出した遺構は弥生時代の袋状竪穴2基、中世～近世の不明土塙1基、溝1条で、溝はF-9a調査区の溝と連続するものである。

袋状竪穴は共に円形で、1号竪穴は径1.6mで底のみが残る。埋土に弥生時代中期の土器片、土製投弾を検出した。2号竪穴は径約2m、深さ50cmで一部を溝に切られている。また竪穴の約半分はトレンチ外で、発掘を断念した。埋土中に若干の弥生式土器を含んでいる。時期は1

2 E-9 b 調査区



号竪穴とほぼ同じである。

不明土塁は溝に大部分を破壊されていて、旧形を復原できないが、平面プランからして地下式横穴の可能性もある。埋土中より青磁器、土師器の出土がある。鎌倉時代の遺構である。

溝は最近の擾乱（ゴミ穴）によってかなり変形されているが、幅約3m、断面形は逆台形状をなし、深さ40～50cmである。

発掘区の西端で方形の造出しがあり、溝幅は1.4mにせばまる。ここに橋がかけられていたと考えられ、その延長線には浅い凹みがあり道であったと想定され



Fig. 2 E-9 b 調査区全景

Fig. 3 第2号竪穴断面

Fig. 4 第1号竪穴遺物出土状況

る。溝の埠上中より糸切りの土師器が出土している。室町～江戸時代にかけての遺構である。

この他に、攪乱層（ゴミ穴）から多量の弥生式土器や砾石が出土している。弥生式土器の大部分は壺形の破片で、中には円錐の壺形土器もあり、復原可能なものも含んでいて、周辺に壺形墓地が存在することを示唆している。

以上の発掘成果は、F-9-a調査区の成果と異なるものではないが、遺跡の内容が不明であった南台地についての手がかりが増加したといえる。弥生時代の袋状堅穴は密集することはなく、散発的に存在し、その存続期間は前期より中期に及ぶことが判明した。また周辺に前期末～中期にいたる墓地が存在することも想定され、北台地との関連性においても注目される。

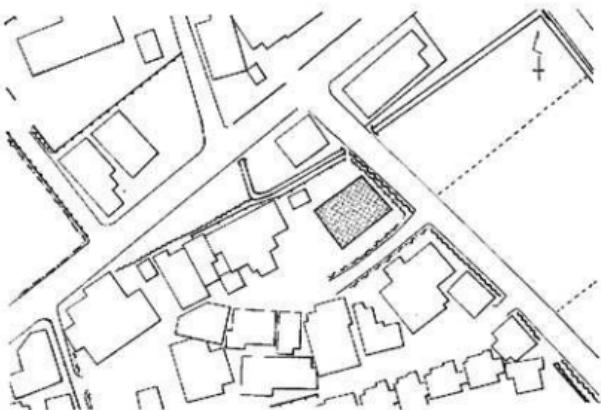
溝は、F-9-a調査区の溝と連続する。いまだ全容を明らかにしたとはいえないが、住居を囲む方形の区画にめぐると考えられる。溝に関連した橋、道の存在は、板付における中～近世の村落研究に貴重な資料を提供するものである。

（山崎純男）

### 3. I-11調査区

本調査区は板付遺跡の西南に位置する。諸岡台地の東北部にあたり、台地と水田の変換点に立地する。住宅の建替に伴う調査のため発掘区は $10 \times 8$ mと限られたものとなった。表土層を除去すると、すぐ地山面（鳥柄ローム層）になる。台地の削平が考えられ、遺構の残存状態が極めて悪い。

遺構として確認したものは柱穴と溝であるが、溝中からは最近までの陶器類が出土し、戦前まで井戸からの排水溝として使用されていたものである。柱穴径20cmは深さ30cmで配置にまと



まりがあり2間×3間の建物が考えられる。柱穴は1.8mである。柱穴には割石を居え根固めしたものがある。時期については、柱穴より土師器の小片を検出したのみで断定しがたいが、中世～近世のものであろうか。

Fig.5 I-11調査区の位置(1/1000)

（山崎純男）

3 I-11調査区



4 F-8 b 調査区

Fig. 6 I-11調査区全景

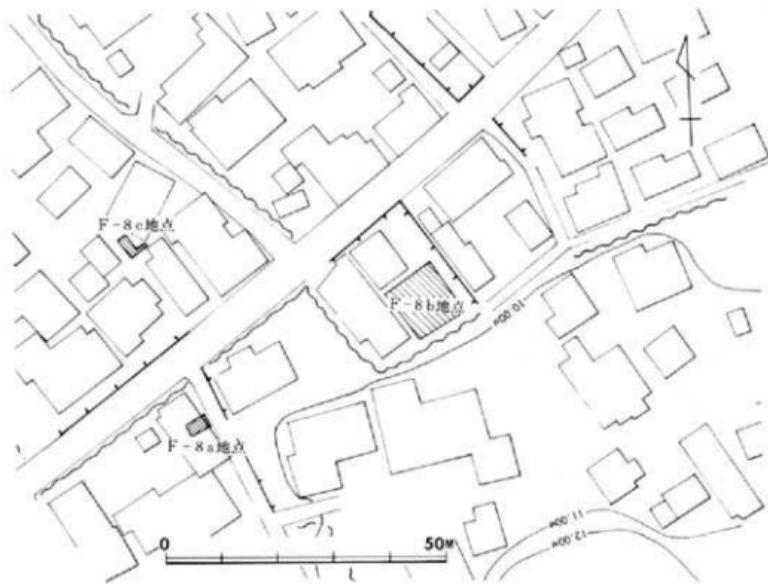


Fig. 7 F-8 b 調査区の位置



Fig. 8 F-8 b 調査区全景



Fig. 9 第3号竪穴遺物出土状況

板付台地は、旧県道部が鞍部となり北台地と南台地に分けられる。本調査区は、南北両台地の鞍部で旧県道の南に位置する。(Fig. 7)

調査は、鞍部の状態確認を目的として行なった。本調査区は、宅地にするため約40cm盛土が行なわれていたので、盛土を除き可能な限り、範囲を広げて調査を実施した。盛土を除くと、標高8.80mで旧水田となる。水田耕土は20cmで、下に黒色粘質土層・黒色砂混り粘土層・褐色粗砂層・青灰色微砂～粗砂層・鳥栖ローム層・八女粘土層の順に堆積している。鳥栖ロームは、発掘区の南側で約5cmの厚さで存在し発掘区中央部で無くなっている。また水田耕土の下から、八女粘土層の上の土層堆積も、南から北へ流れていることから、本地点はもともと鞍部となっていたことが判明した。

遺構としては、溝状遺構2条、竪穴5基が確認された。溝状遺構は幅40cm、深さ10cmのU字溝と皿状の凹まりの溝で、2条とも発掘区を東西に横断する。竪穴は、発掘区の南西隅にある径1.50mの円形の竪穴(井戸状遺構)が中世であるが(Fig. 8)、他の4基は弥生時代中期後葉のものである。弥生時代の竪穴は、いずれも不正形で深さもまちまちである。第3号竪穴(Fig. 9)は、その1つで、長径95cm・短径80cm・深さ25cmの橢円形をなしている。

遺物は黒色粘質土層から青灰色微砂～粗砂層まで多量に出土した。中世の竪穴を除く竪穴も

4 F-8 b 洞査図

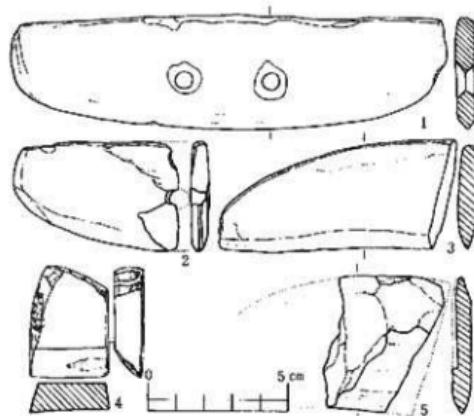


Fig.10 出土石器実測図

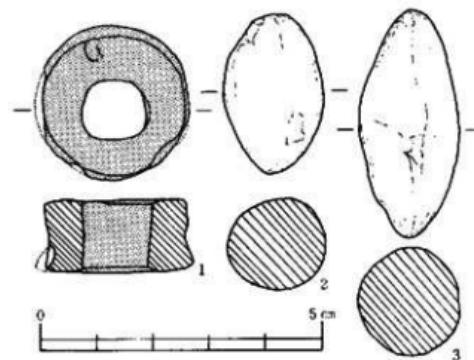


Fig.11 出土土製品実測図

同様である。出土遺物は土器・土製品・石器に分けられ、木製品は出土しなかった。

土器は壺形土器・壺形土器・高杯・器台等で、窓以外は丹塗りされたものが多い。また把手をもつジョッキ形土器片も出土している。弥生時代前期から中期中葉のものも少量あるがほとんどが弥生時代中期後葉の土器である。

土製品(Fig.11)には滑車形耳飾り・紡錘車・投弾等がある。1は上面・下面とも円形で上面径が25.5mm、下面径が27.5mmで、厚さは13mmで、中央部に1×1cmの隅丸方形の焼成前の穿孔がある。また側辺中央部には一条の浅い沈線が巡っている。表裏・側・内面は円塗りのため赤褐色を呈し、胎土には石英・砂粒を含み焼成も良好である。2・3は手ざくねによって、紡錘形に整形されている土器投弾である。2は長さ2.9cm、厚さ1.7cmで、3は長さ4.2cm、厚さ1.9cmで、2点とも淡褐色から褐色を呈し、胎土には石英・砂量を含み、焼成も良好である。

石器 (Fig.10) は太形始刃石斧・長平片刃石斧・石庖丁・石庖丁末製品・石鎌・ナイフ形石器・削器・使用痕のある剥片石器・砥石等が出土している。1・2は凝灰岩質安山岩ホルンフェルス製の石庖丁で敲打整形後全面研磨を加えている。2点とも、穿孔は表裏から行ない、刃部は両刃である。3は凝灰岩質ホルンフェルス製石鎌で、敲打整形後研磨を加えており、刃部は両刃である。4は板岩製の扁平片刃石斧で、剝離整形後研磨を加えている。刃部の角度は、50度である。

鞍部が、後世の削平でないことが確認されたことは、本調査区の現時点での成果であり、滑車形耳飾りの出土・丹塗の土器が多い点など、祭祀的な性格が強いといえる。

(山口謙治)



Fig.12 F-5 a . b . c 調査区の位置 (1 / 1000)

## 5. F-5a 調査区

本調査区は北台地に位置する。史跡指定地に隣接し、環溝の北側約50mのところにある。宅地造成に伴う緊急調査であったため、発掘区は広くない。調査前も宅地や畠地として利用されており、遺構は擾乱・削平が多く、あまり良好な状態ではなかった。確認した遺構は弥生時代前期の貯蔵穴3基、同後期の井戸1基、中世の溝1条、時期不明の土塙1、ピット多数である。

### 第1号貯蔵穴 (Fig.17)

北半を中心の溝に切られ、また後世の擾乱により削平され、底の部分を残すのみである。長径推定2.5m、短径約2mの隅丸長方形プランをなし、深さ約50cm、西南側の壁や北東側の一部で



Fig.13 F-5a の調査区



Fig.14 第2号竪穴と遺物出土状況

袋状を呈する。中央付近の床面は粘土が敷かれ固められていた。遺物は全く出土していないが、その平面形等から、弥生時代初頭の可能性が強い。

#### 第2号貯蔵穴 (Fig.14)

一部が発掘区外にあたり全掘はしていない。上部が削平され底部近くの約30cmの深さを残すのみである。長径約2.7m、短径約2mの隅丸長方形プランをなす。東側に床面より約40cmほど深いピットがあるが、プラン、性格とも不明である。また西壁中央に接して、深さ約10cm、径約20cmの小ピットがある。遺物は北壁西寄りと、西壁南寄りの床面近くから板付1式土器の小形壺の完形品がそれぞれ1個出土した (Fig.15)。上の土器は、器高17.2cm、口縁径9.1cm、胸部最大径15.1cm、底径6.6cmを計る。口縁部の肥厚は少ない。肩部には段がつき、内面の接合部の段は強い。全体的に横の窓研磨を行っている。下の土器は器高17.7cm、口縁径10.5cm、胸部最大径17.4cm、底部径6.3cm。口縁部の肥厚はあまり強くない。肩部には残い段がつけられる。内面の接合部の段は強い。全体的に窓研磨だが、口縁部は横ナデ調整である。

#### 第3号貯蔵穴

トレンチ東壁にかかっているため、一部を調査しただけである。長方形を呈するものと思わ

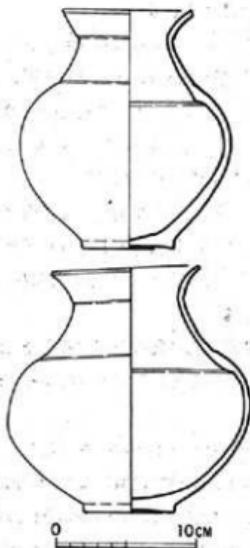


Fig.15 第2号竪穴出土土器

### 5 F-5 a 調査区

れるが不明。底部約7cmの深さしか残っておらず、遺物も出土しなかった。

#### 井戸 (Fig.16)

調査区北東隅に検出した。平面プランは径約1mの円形で、現存の深さは3m強を計る。境地表から約90cm下で鳥栖ローム層から八女粘土層に変わると、そこが第1涌水点である。壁が崩壊し、約2.5cmまで掘るが、本来は素掘りで円筒状のものであったと考える。底は尖る。遺物は土器と木器がある。

#### 土器 (Fig.16)

手づくねのミニチュア土器が4点出土している。写真上は注口土器を模したもので、胴部に焼成前に注口をつける。口縁部を欠くが、現器高4.6cm、胴部最大幅4.1cm。下は蓋で、器高6.1cm、口縁径3.6cm、胴部最大径3.7cmを計る。他の2個は鉢のミニチュアである。土器は最下層である第10層に完形に近いものが出土している。Fig.16の右上の蓋もその1つで口縁部の内傾する、いわゆる複合口縁をもつ。頭部と肩部の接合部に断面二角形の突帯、胴部最大径部に断面がコの字状の突帯各1条を巡らせる。底部は丸底に近い平底である。内外面とも刷毛目調整が著しい。口縁外部には貝殻様の工具で鋸歯文が4個描かれる。この他に長頸壺や、壺、高环破片などがあり、これらは弥生時代後期後葉のものである。

#### 木器 (Fig.16)

この井戸内からは木器もかなり出土した。図示したものは火きり臼である。丸木を長径2.4cm、短径1.9cmの断面長方形に近い多角形に調整し、その広い1面の片方に寄って、径0.9cmほど穴が火切棒によって約1.6~1.9cm間隔につけられ、その横には溝がきざまれている。穴はすべてこげて黒変している。この他に二叉鉤・三叉鉤・鉤の柄・不明木製品・杭なども出土している。

#### 中世の溝 (Fig.17・18)

調査区北側で検出された。溝は幅約2.8mで深さ約1.4mを計る。東から西へ向かって流れているようだ、近接するF-5 C 調査区でも検出されている。断面は「U」字形をなす。堆積土層中から、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、青磁器、高麗青磁、スラッグ、弥生式土器等が出土した。

#### 土塙

ほぼ南北に長軸を有する長径1.2m、短径0.6mの長方形のプランをもつ。深さは約40cmを残している。遺物は発見されなかったが、弥生時代のものであろう。

#### ピット

多数のピットが検出されたが、いずれも時期不明で、またまとまるものもなかった。

以上、本地區は環溝より約50m北側にありながら、弥生時代初頭と思われる貯蔵穴3基が検出されたが、この方面の調査は以前にはなされておらず、貯蔵穴の分布について新知見を得た。また弥生時代後半の井戸は板付跡では初めての検出であり、このあとF-5 C 地点でこれより若干古い井戸が検出されたが、いずれも内部より祭祀に使用された土器の山上があり、この時期の解明上役立つものであろう。本井戸は木器、特に火きり臼等の出土や、ミニチュアの注口土器を模したものもあり注目される。中世の溝も、これがF-5 C 地点まで延びることから、かなり大規模なものであり、板付部落における中世社会の解明に役立つものであろう。

(次)

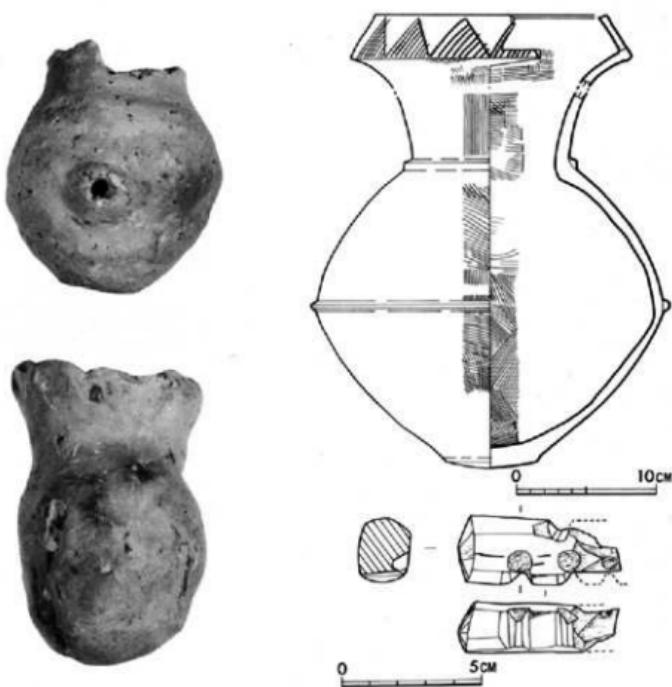


Fig.16 井戸とその出土遺物

5 F-5 a の調査区



Fig.17 中世溝と第1号堅穴



Fig.18 中世溝断面

## 6. F-5b 調査区



Fig.19 F-5b 調査区全景

本調査区は北台地の東北部、環溝の北100mに位置し、道をへだてて新川が北流している。F-5a調査区とは東に35m離れている。現在は旧県道の高さに埋められて畠になつてゐるが、10年前までは現在の標高よりも約1mほど低く水田となつていた部分である。発掘結果の層序関係も以上の埋めたてを証明するものであった。層序は第1層、埋土、第2層は旧水田耕作土、床土、第3層、黒色有機質の遺物包含層、第4

層、地山である鳥栖ローム、八女粘土層となつてゐる。地山面は西から東に向つて傾斜し、発掘区東側では鳥栖ローム層の下にある八女粘土層が直接表面に出でてゐる。遺構としては、南北に流れる溝1条と中世の井戸1基、弥生時代の柱穴および不明土塙がある。遺構の残存状態、地山面からしてこの地域も後世にかなり削平されると考えられる。包含層は東側が厚く西



Fig.20 中世の井戸



Fig.21・22 遺物出土状況

おわっている。井戸わくには曲物が使用されていた可能性が強く、一部その材質が存在していた。溝は幅1m、深さ1m、長さ7mにわたって確認したもので、中には下層に粘質土、上層に砂層が堆積している。時期的には中世以降である。水田の水路であったと考える。

遺物としては包含層中より多量の弥生式土器（中期中葉～後半に限られ、甕棺片、丹塗りの甕、大型器台、高杯、器台があり、完形に近いものや接合可能な破片が多い）、土製投弾、磨石が出土している。組み合せからすれば埋葬に関係あるものであろう。また炭化米が包含層中より多量に出土しているが、時期的には先にあげた諸条件から決定しがたいものである。

中世井戸からは瓦質土器、不明土製品が出土している。

以上の発掘所見からすれば、付近に弥生時代の埋葬地が存在していたものと考えられる。不明土塙が土塙墓であれば、この地はその東限を示していると考えられる。この地域の削平は開田事業に伴う可能性が強く、その時期は中世以前にもとめられる。中世の井戸は住居に伴うものではなく水田に伴う野井戸的なものであったかもしれない。なお、地山面の傾斜からすれば、北台地の限界は隣接する道路にそっているものと推測される。

（山崎純男）

側はわずか数cmの厚さである。包含層中には多量の弥生式土器（中期の甕棺等埋葬に伴うもの）が含まれるが、遺構の状態や、わずか1片ではあるが滑石製石なべが混入していることからして、開田工事等によって他所（台地上）から運び込まれた可能性が強い。しかし、中世の井戸はこの包含層を切り込んでつくられているので、すくなくともこの包含層が移動されたのは中世以前であろう。

ピットは8個検出したが、いずれも径10～20cmで深さは数cmと浅い。不明土塙は128cm×50cmの長方形プランをなし、深さ50cmを計り、塙底に径20cm、深さ20cmのピットが存在する。土塙墓かとも考えられるが確証はない。

井戸は径1mの円形プランで、深さ1.2mで底は八女粘土層中で

## 7. F-5c 調査区



Fig.23 F-5c 調査区

本調査区は、環濠の北側に位置し、F-5a 調査区の西側に位置する。東から西へかけて段差をもった削平をうけて旧地形の復原はできない。標高8.25m~9.00mの間である。

検出遺構は、弥生時代の竪穴4基、小竪穴2基、中世の溝2条で、竪穴のうち3基は井戸である。

1号竪穴は井戸で平面は直径約130cmの不整円形、深さ約210cmである。断面形は細長い台形をなし、底面は平坦である。現遺構面は、鳥栖ローム層と八女粘土層との境で、水による浸食をうけている。最下面での遺物検出はなく、下層で、2つのグループの遺物出土状況が見られる。遺物は、甕、壺、器台、小形鉢で、その他に木片が数点である。

2号竪穴は、直径約90cmの円形、深さ30cm、壁は垂直で、床面は平坦である。弥生時代のものであるが、他の遺構との関連からすると井戸とは断定できない。甕の破片数点が出土している。

3号竪穴は、直径約100cm、深さ約200cmの平面不整円形で、床面は平坦である。井戸である。鳥栖ローム層と八女粘土層の境で、水の浸透による壁の崩落がある。遺物は、床面近くで集中しており、二重口縁壺が多く、その他に高壺1点、直口壺4点がある。内1点には胸下半に穿孔が見られる。

4号竪穴は、中世溝に切られているが、直径約100cmの不整円形、深さは約200cmの井戸である。遺物は、床面出土ではないが、甕3点、直口壺1点、袋状口縁壺1点、鉢1点、器台1点を出土している。

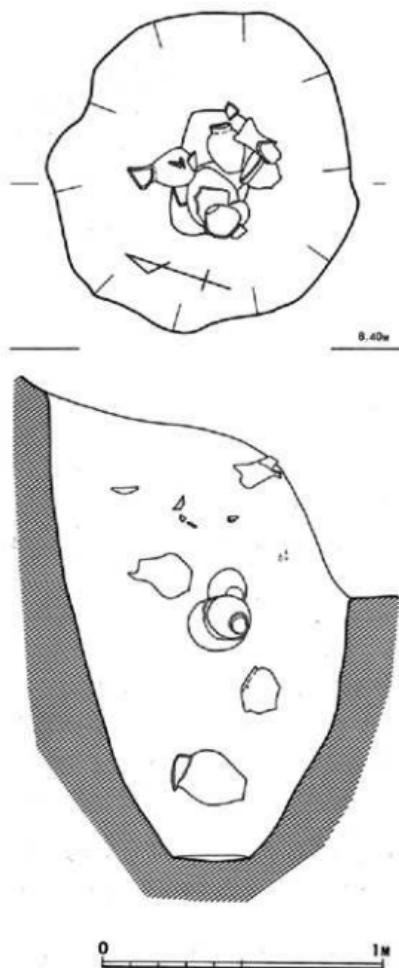


Fig. 24 第4号竪穴

ある。

#### 出土遺物 (Fig.26)

図の遺物は、全て4号竪穴の出土土器である。

1は袋状口縁壺、頸部は短かく、口縁端は丸みをもつ、器表面はハケ目調整、口縁部には打



Fig.25 第4号竪穴遺物出土状況

小竪穴は、調査区の東南に2基あり、柱穴と考えられるが、住居址の検出には至っていない。

溝は、南北溝と東西溝が、T字形にぶつかっており、調査時の検討から、同時併存のものと考える。2本の溝とともに削平を受けている。

東西溝の幅は、広いところで約350cm、狭いところで約250cm、深さは、東側で約130cm、西側では約50cmである。東側隅では、杭列が溝を横ぎるが、これは溝の中央部のみで、杭列の性格および溝との関連はわからない。

溝の床面の絶対標高は東西ともほとんど差がない。

南北溝の幅は、広いところで約220cm、狭いところで180cm、深さは、北側で約70cm、南側で約55cmである。床面の絶対標高にはほとんど差がない。

2本の溝は、断面形が、かまばこ形をしており、また、床面絶対標高は、南北溝の方が高い。

現時点での板付台地における2本の溝の性格については不明である。なお、東西溝は、F-5 a 調査区の溝と連続するもので

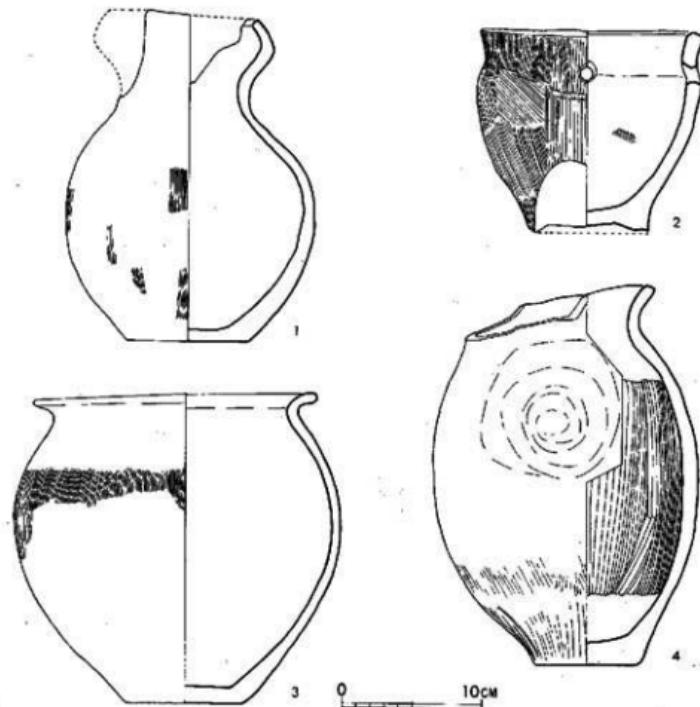


Fig. 26 第4号堅穴出土土器実測図

欠きの痕が見られる。器高23.5cm。石英砂を含み、焼成良好、淡暗褐色を帯びる。

2は鉢、器壁は厚く、口縁端は少し凹む、口縁下には直径0.9cmの焼成前の穿孔、器面は表高ともハケ口調整。器表面には意図的にたいたい痕がみられる。砂粒を含み、焼成良好、赤褐色を帯びる。器高14.4cm。

3は甕、口縁部は外反、頭部の屈曲は明瞭でない、器面は荒れているが、ハケ口調整痕が見られる。砂粒を多く含み、焼成良好、暗褐色を帯びる。器高22cm。

4は甕、口縁部外反、器表面はヘラ状工具によるものと思われる調整、内面はヘラ状工具による、タテ方向のなで調整。剣部上部には、粘土による孔の補修が見られる。口縁部は一部打ち欠き、砂粒を含み、焼成良好、暗褐色～黄褐色を帯びる。器高27cm。

以上から本調査区は前半は受けながらも、弥生時代には、後期における、井戸を付属施設とした、住居地域であったと考える。また、近世には、その性格は不明としながらも溝を検出したことが、本調査区の成果である。

(原 僕一)

7 F-5c 調査区

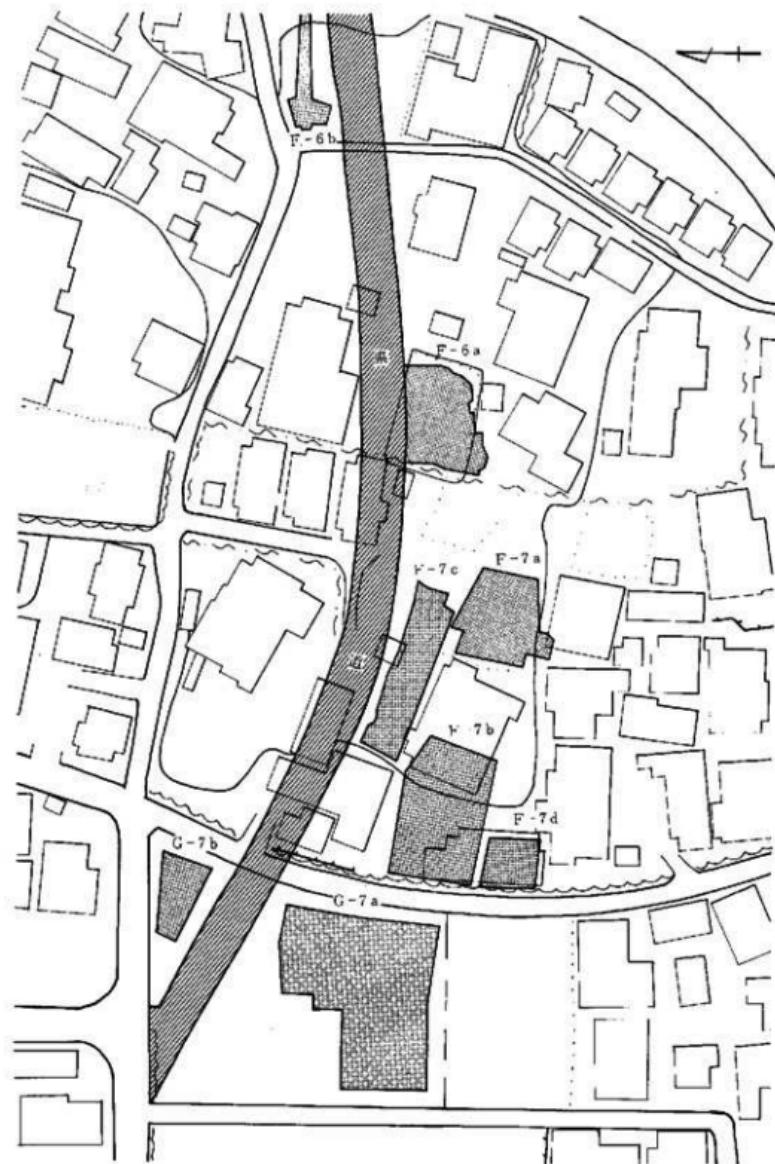


Fig.27 F-6a,b 7a~d G-7a,b調査区の位置

## ■ 8. F-6a 調査区



Fig.28 F-6a 調査区全景（上：遺構確認、下：発掘後）

板付台地は、弥生時代以降各時期の各種の遺構が残っているが、ほとんどが後世の削平を受けている。こうした中で県道505号線の南に隣接する本地区（Fig.27）は、標高11.50mで、もともと原状を保っており、遺構の遺存状態も良好と思われた。また県道505号線新設改良に伴なった発掘調査によって、本地区も袋状豎穴の所在も豎穴住居址の遺存も予測できた。

調査は、可能な限り範囲を広げて実施した。まず30~40cmの表土を除き、遺構のプラン確認作業から始めた（Fig.28-上）。プラン確認の結果、豎穴・柱穴状小豎穴等があることが認められたので、切り合い関係・遺構の埋まり方・遺物の出土位置を重視し、可能な限り図化し、

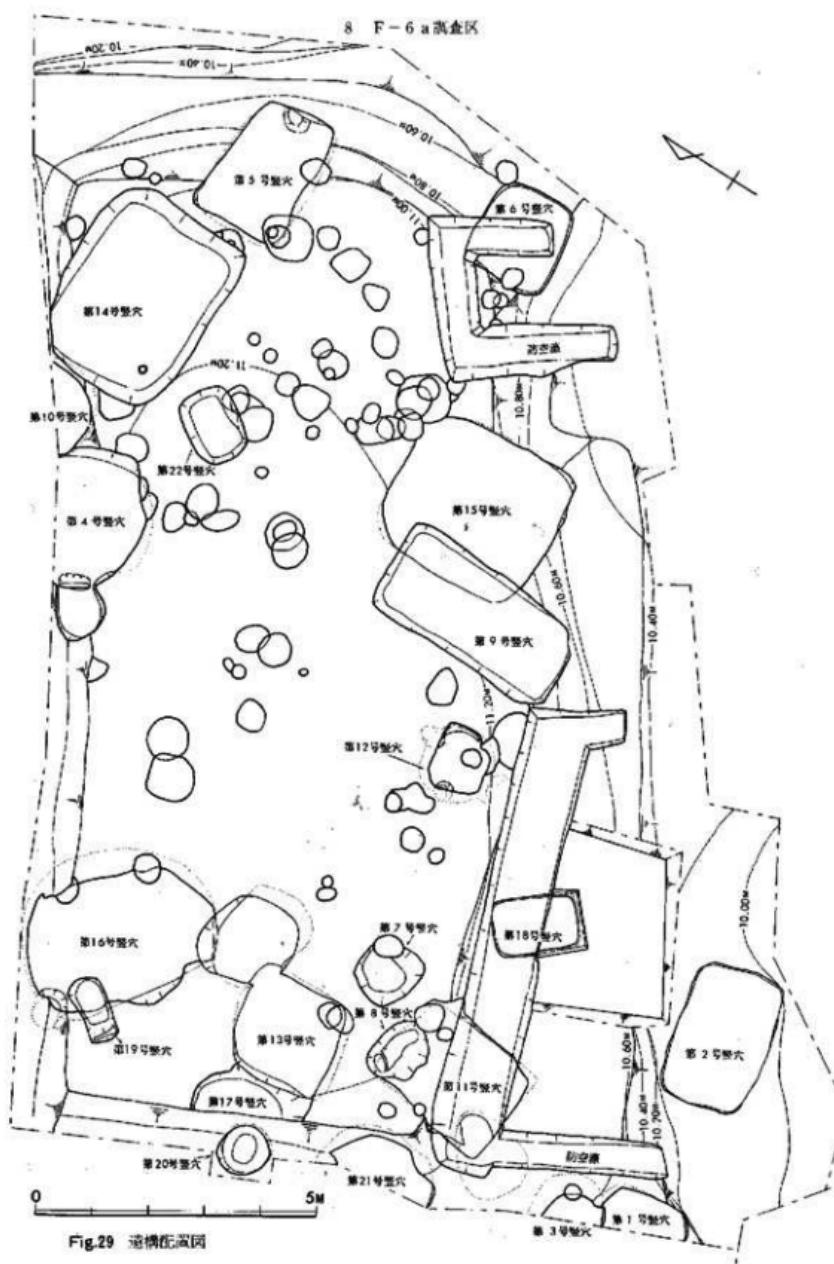


Fig.29 造機配設図

記録写真撮影を行なった。

また柱穴状小窓穴は、柱の痕跡確認・遺物の出かたを重視した。

検出遺構は、竪穴22基・柱穴状小窓穴70余基と大平洋戦争中の防空壕2基(コ字型)が確認された(Fig.29)。まず竪穴からみしていくと、弥生時代の竪穴が15基、中世の竪穴が3基、他の4基は弥生時代のものと思われるが、今後の整理をまって時期を決定したい。以後、時期毎に古いものから標略する。

弥生時代前期の竪穴は、第1・5・6・10~13・16・18・21号の10基である。第10・21号竪穴が円形プラン、第13号竪穴が半円形プランで、他は隅丸方形(または長方形)プランである。前期の竪穴は、いずれも袋状竪穴で、下半部では夜白式板付I・II式の變形土器・壺形土器・鉢形土器と石鏃削器等の石器・炭化米等の自然遺物が出土している。

第1・6・12・13・16・21号竪穴からは彩文土器が出土し、第16号竪穴では、高坏が出土している。また第13号竪穴からは滑石片岩製の勾玉(Fig.31)も出土している。ここで、第12号竪穴(Fig.30)で、土層の堆積状態、遺物の出かたについて見ていくことにする。上場の径1m、床面の径1.3m、深さ1mの隅丸方形の袋状竪穴で、上場には木蓋の痕跡?が見られる。また床面には北壁・西壁に柱穴状の掘り込みが見られた。9層が堆積した段階から壁

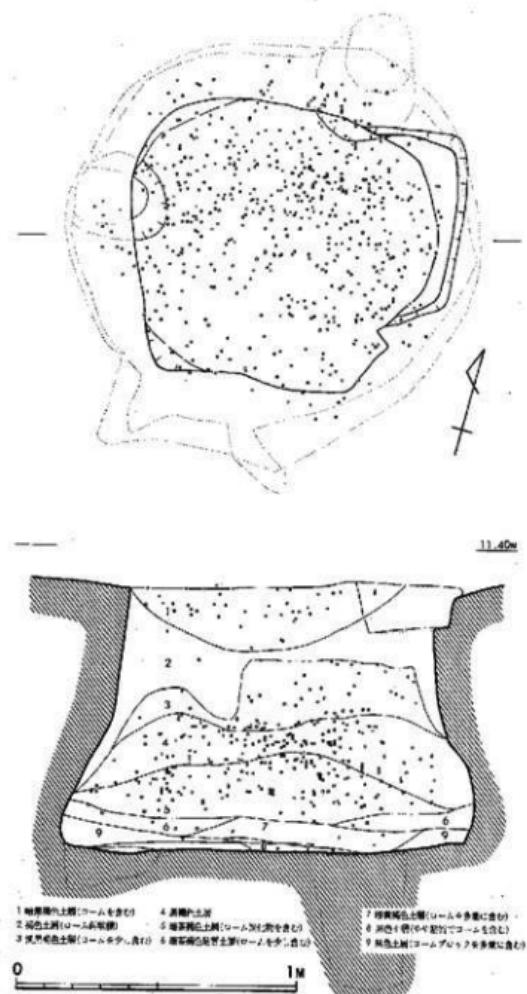


Fig.30 第12号竪穴実測図

## 8 F 6a 調査区

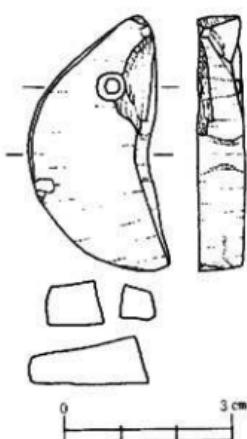


Fig.31 勾玉実測図

の倒落が始まり、3層まで堆積した段階で、この竪穴は壁の崩落によって一気に埋まったことが分った。遺物は、593点(1cm以上の土器片、石器、削片、自然石を含む)出土し、3層までは弥生時代中期前葉の土器片を含んでいるが、4層から下は中期以降の遺物の混入は認められなかった。また遺物の出かたは土層の傾斜にそっており、流れ込んだものと考えられ、この竪穴に置かれていたものは無かった。主な遺物としては、彩文土器片・石斧・石鎌・削器等が出土している。

弥生時代中期の竪穴は、第9・14・15号の3基があり、第9号竪穴は3.6×1.7mで、第14号竪穴は3.5×2.7m、第15号竪穴は3×2.7mといずれも大規模な遺構である。第14・15号竪穴は中期前葉で、第9号竪穴は整理をまつて時期を決定したい。第9号竪穴からは、石剣が、第14号竪穴からは、土器片再利用の紡錘車・投弾等が出土している。

第2・3号竪穴は、前者が隅丸方形で、後者が円形であるが遺物が少なく、確定な時期は判らないが、弥生時代前期の袋状竪穴と考えられる。

中世の竪穴は、第4・20・22号竪穴の3基で、第4号竪穴は地下式横穴で、第20号竪穴は井戸、第22号竪穴は隅丸方形の土塙である。第4号竪穴(地下式横穴)は、竪塙が径90cm、深さ1.8mで、室は2.2m×2.5m(推定)で室の高さは1.3m(推定)であり、竪塙と室の間には木蓋の痕跡がみられた。遺物としては、室の床面直上から环・北条鐵「元宝通寶」3枚等が出土した。また県道側溝工事のため攪乱を受けた所から青磁(Fig.32)が出土したが、これは地下式横穴に副葬されていたものと思われる。第20号竪穴(井戸)からは、柄つきの包丁等が出土している。

他の7・8・17・19号竪穴については、今後の整理によって時期を決定する。

柱穴状小竪穴の中で、第4・5・9・14・15号竪穴に囲まれる1群は、円形に巡ること、中央に炉穴をもつこと等から径7m(推定)の円形竪穴住居の柱穴と考えられる。

今後、各竪穴出土の遺物の点検・復元作業を行ない、遺物ドットを精査して、本地点の報告を行なう予定である。(山口謹治)

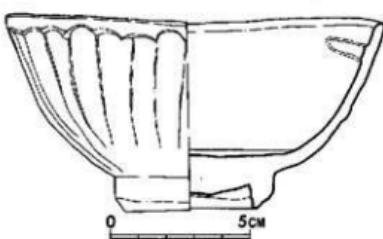


Fig.32 青磁実測図

## 9. F-6b 調査区

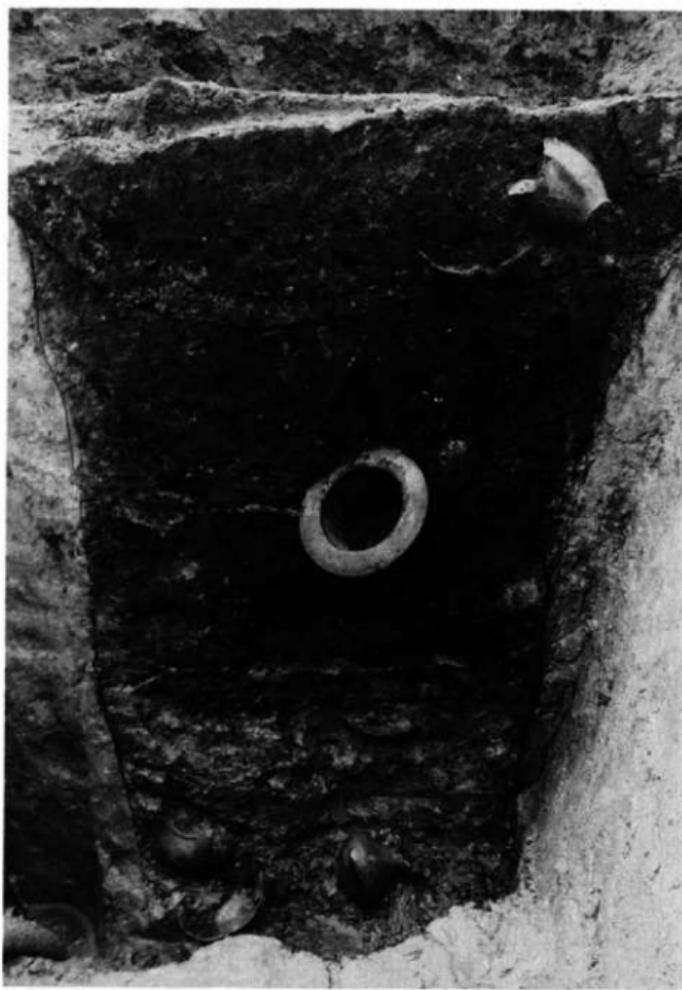


Fig.33 F-6 b 調査区井戸断面

本調査区は板付5丁目4-3に所在し、大正5年銅剣・銅矛を出土した田端遺跡に比定されている地区である。トレンチ調査の結果、壇塚墓はすでに削平されていたが、近世の溝等の配置は中山平次郎氏の見取図と一致し、この地区が田端遺跡であることは疑いない。トレンチ西側



Fig.34 井戸（発掘後）

で弥生時代の井戸 1 基を検出した。この井戸は直径約 1.1m、現存の深さ約 2.2m で、台地削平を考慮すれば、4 m 以上の深さを有していたであろう。遺構確認面の鳥栖ローム層から約 10cm で八女粘土層となり、そこに第 1 の湧水点があり、径が若干広くなる。約 1.8m の深さで青灰色砂層となり、この層が主たる湧水点となり、現在も湧水は激しい。堆積土層は約 1 m の深さまでは黒褐色粘質土層を主として鳥栖ローム層の流れ込みが一部にある。それ以下は流れ込みの八女粘土層と灰褐色粘質土層の互層となっている (Fig.33・35)。

出土遺物は土器がほとんどで、少量の河原石、黒曜石片、小枝片がみられた。土器はほぼ全体にみられたが、特に 4 ヶ所に集中していた (Fig.33・35)。その 1 は遺構確認面から約 30cm までの層の Fig.36 の 1 ~ 10 の土器群で、甕以外は小型のものが多い。甕は「く」の字状口縁を

もつ。その2は約60~90cmの深さで出土したもので大形の丹塗り壺が多い(11・12)。この他に退化した瓢形土器の胴部破片と、内湾気味の口縁をもつ大型の壺がある。その3は約1~1.7mの間に出土したもので(13~19)丹塗りの袋状口縁壺が多い。瓢形土器や壺もあるが、4・17を除いて器壁面の刷毛目調整痕が著しい。17・18は口縁部を打ち欠いている。その4は約1.9~2.1mの深さのもので、2個(20・21)出土したのみである。とともに丹塗りの袋状口縁壺で、いずれも刷毛目調整痕が残る。

以上、出土した土器を層位ごとに分けて重要なものを図示したが、これが時代的な差を示すものかあるいは別な意味をもつものであるかは明らかでない。井戸の機能を考えると、非常に短い時間差を示しているものと考える。

(沢 朝臣)

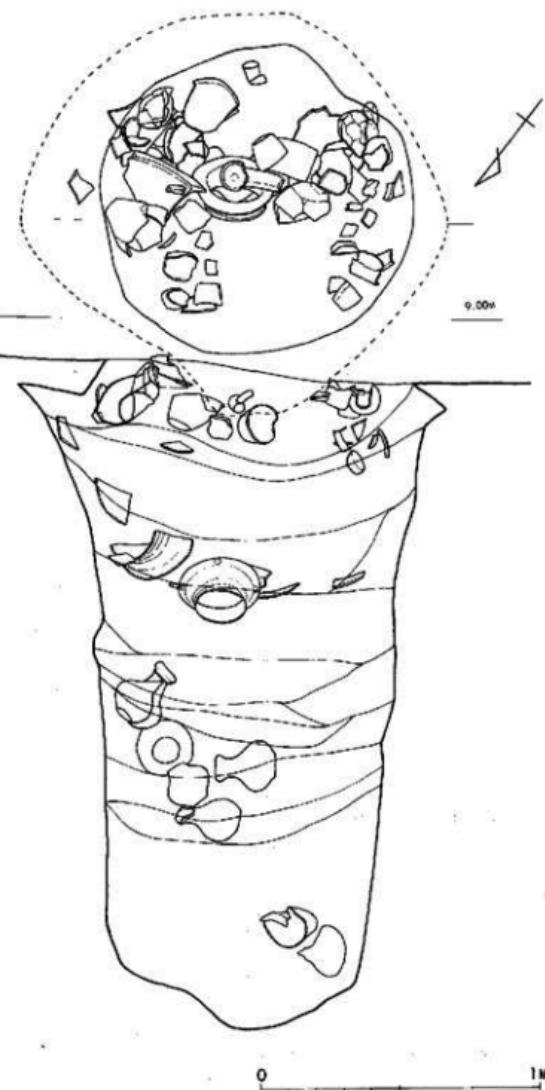


Fig.35 井戸実測図

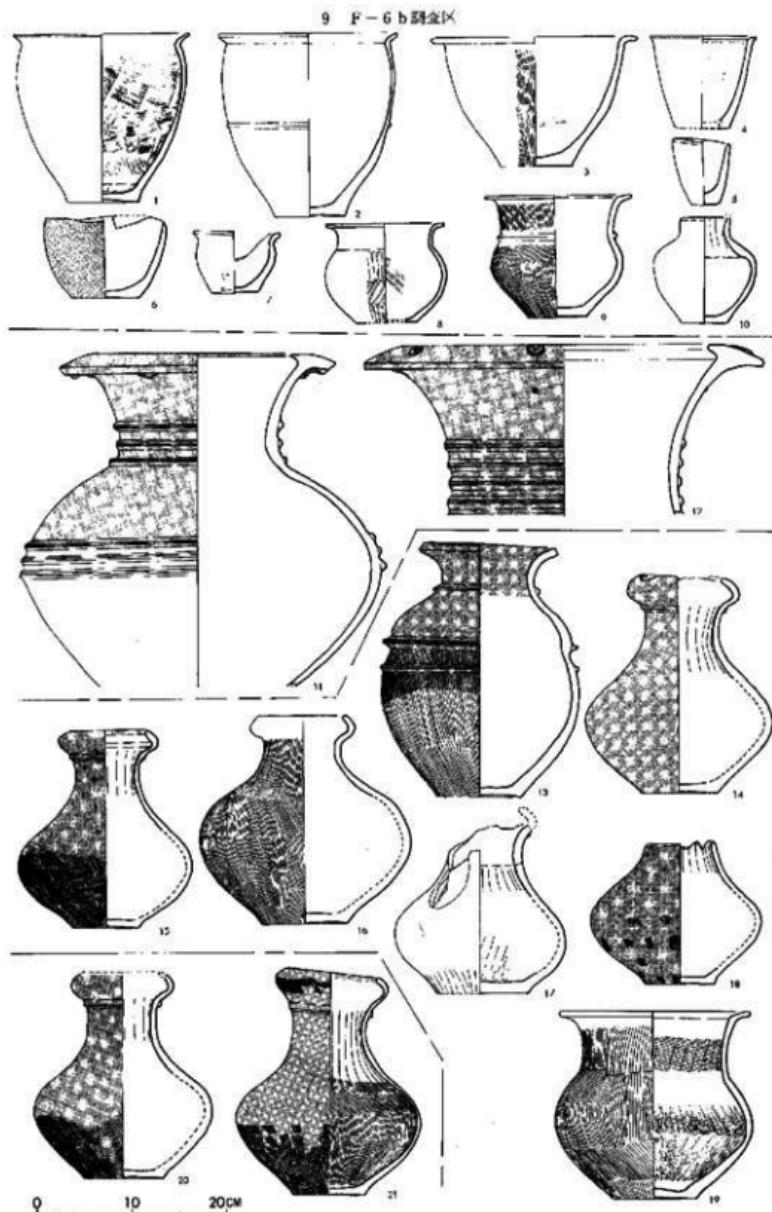


Fig.36 丹戸出土土器実測図

## 10. F-7a調査区



Fig.37 F-7a調査区全景

本調査区は北台地に位置し、環溝南端から南へ35mの地区である。F-7c調査区の南に隣接する。もと畠地として利用されていた。耕作土の直下に鳥栖ローム層が存在する。遺構は鳥栖ローム層を切り込んでつくられるが台地の削平が著しく遺存状態は良好でない。

遺構としては、弥生時代前期の袋状竪穴2基、中世の地下式横穴2基、昭和19年につくられた防空壕1基、時期不明の溝2条、土塙、ピット等を検出した。

以下、各遺構の概略について説明を加える。

## 防空壕

昭和19年につくられたもので、幅1.2~1.3m、現状の深さは約80cm、コの字状の平面形をなし、出入口には階段を付設するが、南側の出入口は溝によって破壊されている。内部の壁にそって等間隔に柱穴がならび、上部の構築を行ったことが知られる。開書きによると柱をたて、それに横木をわたし、屋根をふき、さらにその上に土をかけ、草木でかくしたものであったという。

## 地下式横穴 (Fig.38・39)

2基検出した。いずれも台地上の削平により天井部を失っている。また、第1号地下式横穴



Fig.38 1号地下式横穴



Fig.39 2号地下式横穴

は調査区東壁、第2号地下式横穴は北壁にかかり完掘はしていない。第1号地下式横穴は横に広い不整梢円形の玄室プランをもつ。推定幅5m長さ約3m。豎坑は一辺長約80cmの隅丸長方形をなす。豎坑の床面より玄室床面はさらに低くなる。玄室西側には一段高い屍床状の遺構が付設される。東側については未掘のため不明。内部からは性格不明の鉄器1点が出土したのみである。第2号地下式横穴は玄室が縦長の不整梢円形で、推定長約2.5m、幅約1.7m、豎坑は一辺約80mの方形をなす。第1号地下式横穴に比較して小形である。内部より糸切り底の土師器皿1点が出土した。また、玄室西側に炭化物の分布がみられた。なお、この周辺からかつて砂岩製の板碑が採集されている。



Fig.40 第1号袋状豊穴断面

### 貯藏穴

#### 第1号袋状豊穴 (Fig.40)

東南側を第1号地下式横穴に切られてはいるが、比較的残存状態の良い豊穴である。上部は削平されているが、遺構確認面で径1.3mの円形を呈する。確認面から約18cm下がった点から底に向かって拡がりはじめ、底面では径約1.9mとなる。現存の深さは約96cmである。遺物はほぼ全面に土器破片の分布をみるが、特に東南壁側の床面近くに、壺、甕の一括遺物が出土した。この他に、石器や紡錘車が出土している。時期は出土土器より板付II a式の時期と考える。

#### 第2号袋状豊穴

調査区の南に孤立して存在する。平面プランは1辺約2m弱の隅丸方形をなすが、南側の一部が張り出している。上部を削平されているため現存の深さは約60cmである。一部を除いて壁は袋状をなす。遺物は、土器、石器類の他に、上部に獸骨が出土しており、廻棄後の凹みをゴミ捨場として利用したものと考える。時期は出土土器より板付II a式の時期と考える。

#### その他の遺構

南東から北西の方向へ走る溝二条があるが西側の小さな溝は途中で消滅し、東側の溝は調査区北側近くで西に曲がる。遺構の切り合い関係からすれば、この溝は非常に新しいものである。この他に新しい土塙やピットが存在する。

(沢 皇臣)

## 11. F-7 b 調査区



Fig.41 F-7 b 調査区全景

本調査区は、板付台地を東西に走る県道505線の南に位置し、環濠の西南部台地際であり、東北でF-7 c 調査区と南でF-7 d 調査区と、西側台地下はG-7 a 調査区に隣接する。

本調査区は削平を受けており、台地端には側溝が走り台地の正確な復原はできないが、板付台地の西側を走るこの側溝が、台地西側の際と考えてよい。

現標高は9.00m～10.00mで、西から東へ向かって高くなる。

遺構は調査区の西北部に集中しており、弥生時代の竪穴3基と小竪穴群、古代末～中世の竪穴2基と、時期不詳の土塙が1基、さらにF-7 d 調査区に連なる溝を検出した。

1号竪穴は弥生時代のもので、直径約100cmの不整円形で、深さ約110cm、床面は45cm×40cmである。井戸とは考え難い性格不明のものである。

2号竪穴（1号井戸）は、東側をゴミ穴で切られているが、直径約80cmの不整円形で、深さ約160cm、床面は八女粘土層にある。鳥栖ローム層と八女粘土との境の壁は、水の浸透により崩落している。土層は6層に分かれ、1・2層は小破片が、3層以下に大形の土器片が集中していた。この3層以下の遺物の出土状態は大きく3つのグループに分かれるが、いずれも時期差を示すほどのものではない。遺物はほとんど土器片で、中には、意図的な打欠きのあるものを見られた。また最下部に甕の破片が横たわっている点は、G-5 a 調査区10号竪穴（山口、1976）に類似するという興味ある資料である。

3号竪穴（2号井戸）は、弥生時代のもので、南側をゴミ穴で切られるが、直径約90cmの不整円形で、深さ約160cm、1号井戸の西側に隣接する。本井戸も1号井戸同様、鳥栖ローム層と八女粘土層との境の壁は水の浸透によって崩落している。床面は八女粘土層であり、完形土器を1点と数点の木片を出土した。

小竪穴群は、井戸の南側で、1間×2間の掘立柱遺構が想定できたが、さらに検討を必要とす

る。

古代末～中世と考えられる竪穴2基がある。遺構の崩落が激しく、原形を保っていないが、井戸と想定することが可能である。

また、2号井戸を切る形で、土塙が検出できた。約250cm×110cmの隅丸長方形で、深さは約50cmである。遺物の検出がなく、時期を明らかにし得ない。

以上の成果から、本調査区は東側での遺構検出はなく、西側に偏っていた。本調査区ではG-7a調査区に関連する遺構、遺物は全く検出されず、検討の余地を残している。個々の遺構では、1号井戸で、弥生時代中期末～後期初頭の土器の良好な資料をえたこと、さらに弥生時代中期～後期にかけて集落域が想定できることは、県道A-4区（沢、1977）、F-7c調査区での住居址の検出から、これらの地域一帯を中心～後期にかけての生活域を形成していたことを確認せるものである。さらに古代末～中世においても、生活地としての利用がなされたことが想定できる。

(原俊一)

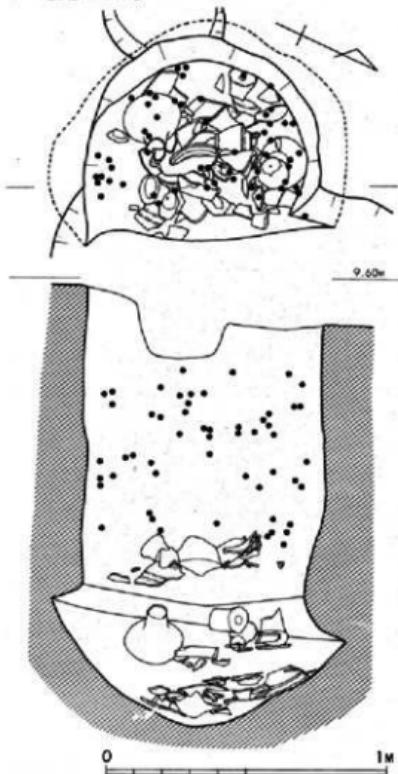


Fig.42 1号井戸実測図



Fig.43 1号井戸遺物出土状況

上：上段遺物

中：中段遺物

下：底遺物

## 12. F-7c 調査区



Fig.44 F-7c 調査区全景

本調査区は県道505号線のA3・4区に南接し、環溝外約30mの所に位置する。

本地区はすでに削平をうけており、表土直下は鳥栖ローム層となっている。畑に利用されていたためか、うねの痕跡が全体に目だつ。遺構は調査区の東西にまとまり、中央には江戸時代

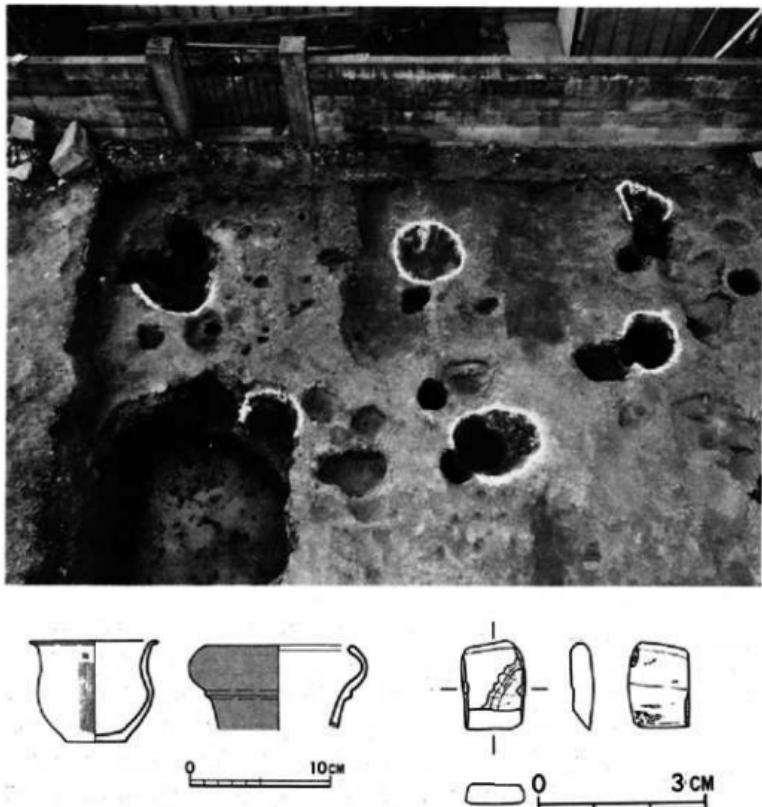


Fig.45 住居址と出土遺物

以降の井戸 1 基と若干のビットに限られる。東側には弥生時代前期と中期の円形の袋状竪穴各 1 基があり、また江戸時代の甕棺墓 4 基と時期不明の土塚 1 基がある。西側には住居 址 1 軒と近世の井戸 1 基、若干のビットが存在する。住居址は削平のため中央ビットと柱穴のみ残存する。柱穴間は 80~90cm、柱穴には柱根の痕がよく残っている。住居址は径約 6 m の円形と推測する。柱穴内からは土器 (Fig.45)、中央ビット内から小形の扁平磨製石斧 (Fig.45) が出土した。またこの住居址は建て替えが行われている。土器出土柱穴に切られた古い柱穴内から、性格不明の鉄器が出土している。住居址の時期は弥生時代中期末～後期初頭に比定できる。

調査区中央には弥生時代の遺構は存在せず、これは隣接する県道調査の A 3 区西側に遺構がないことと一致する。

(沢 里臣)

## 13. F-7d 調査区



Fig.46 F-7d 調査区全景

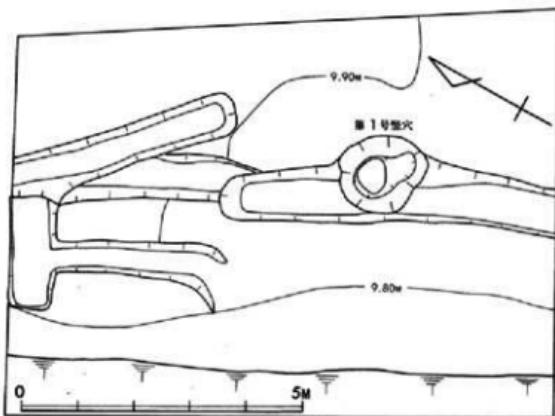


Fig.47 遺構配置図

かる。井戸枠等の施設は検出できなかった。井戸の底は八女粘土層中に達しており、鳥栖ローム層と八女粘土層の境の壁は水の浸透により崩落している。井戸の時期は出土土器より古代末～中世と考える。

溝は全てが南北方向である。性格は不明。溝内からは弥生時代～近世にかけての遺物が出土

本調査区は、F-7b 調査区に隣接する。調査区は削平を受け、現標高は9.80～9.90mで、西から東へ高くなる。西側の台地端は側溝工事のため旧地形は復原できない。

遺構は溝状遺構と井戸1基を検出した。井戸は、平面形が1.4m×1.6mの不整円形で、深さ約2.6mを計

している。

出土遺物 (Fig.48. 1~10、溝 11、12は井戸) 1、2は平坦口縁の甌で、口縁下に1~2条の断面二角形の突帯がめぐる。3、4は口縁部上面が内傾する。4は丹塗り、焼成前の穿孔を4つ持つ。5、6は外面ハケ日調整、7はスリ鉢、口縁下に透しをもつ。暗青灰色をなす。8は縁の釉がけ、9は白釉がかかる。10はロクロ整形で下半がヘラ削り、11は坏身で口縁が外反する。底部はヘラ削り、12は今山製の太形蛤刃石斧である。刃部を欠損する。 (原 傲一)

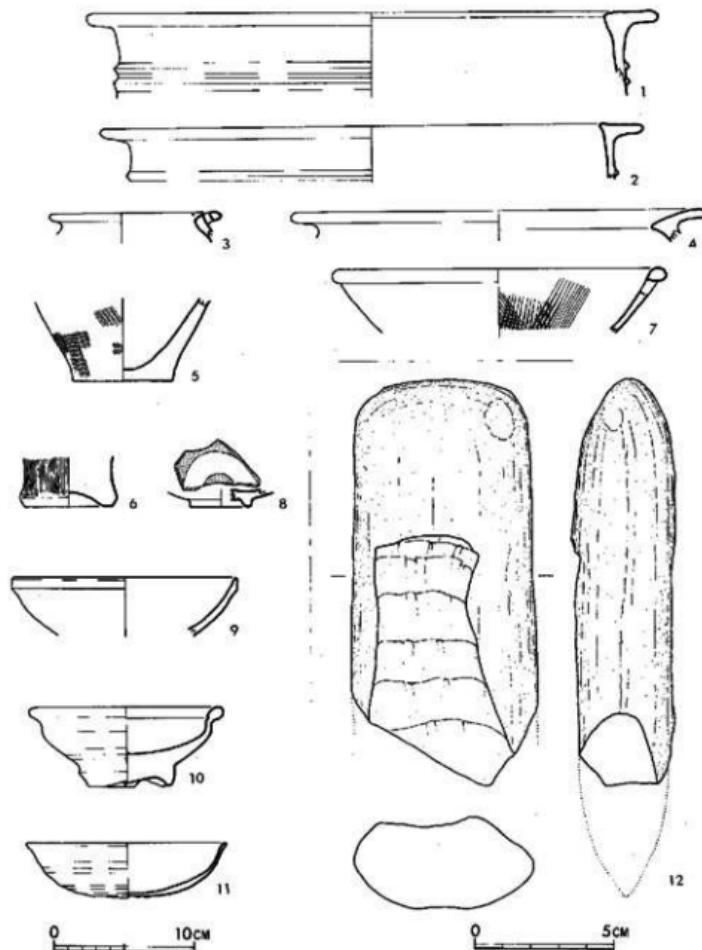


Fig.48 F-7 d 調査区出土遺物

## 14. G-7 a, b 調査区

本調査区は北台地の史跡指定地の環溝の南西部、台池に接した水田地帯に位置する。1978年度調査区の中で最も注目する成果を得た調査区である。G-7 a, G-7 b 調査区は県道505号線をはさんで対称している。調査の都合上、先に調査を着手した県道南側をG-7 a 調査区、後から調査した県道北側をG-7 b 調査区とした。この両調査区はもともと一枚の水田であったが、県道の新設によって分断されたもので、層位、遺構は両者間で大差ないので、ここでは両調査区をまとめて概略を紹介したいと思う。

G-7 a, b 向調査区にはさまれている県道部分は、1976年度に発掘調査を終了していたが、その発掘所見では、現水田面下に、弥生時代中期～中世の遺物が混在した粘土層があり、その下層に板付I式土器が多く、夜臼式土器が共存し、さらに下層には板付I式土器が少く、夜臼式土器が集中するという注目すべき成果が把握されていた。しかし、発掘区がせまく、また湧水も激しかったためその詳細は不明な点が多い。

今回の調査は、県道部分の調査成果の確認を目的とし、発掘調査に際しては、表土下の弥生時代中期～中世の包含層下の前期包含層について特に慎重を期し、出土土器の層位、平面的分布については、1点1点をドットして精査に努めた。その結果は、板付I式土器と夜臼式土器の共存層の下に、夜臼式土器のみの単純層を確認し、さらに、板付I式土器と夜臼式土器共存の時期と夜臼式土器単純の時期のそれぞれに水田址とそれに伴う施設を確認した。以下、その概略を述べてみよう。

### 層位 (Fig.56)

層序関係は細く分けると20数層に分けることが可能であるが、大略は次のようになる。

G-7 a 調査区は、表土より、第1層、現水田耕作土、第2層、鉄分の沈殿した床土、第3層、褐色粘土層、第4層、砂混入淡茶褐色粘質土層、第5層、淡茶褐色混砂土層、第6層、粗砂層、第7層、黒灰色粘土層、第8層、粗砂層（部分的に存在する）、第9層、有機質の暗黒灰色粘土層、第10層、青灰色細砂層、第11層、茶～白砂層の互層、第12層、灰黑色砂質粘土層、第13層、暗灰黑色砂質土層、第14層、黒灰色粘質土層、第15層、地山の黒色粘土層、16層、八女粘土層となっている。第3、4層は、弥生時代中期中葉～鎌倉時代までの土器を多量に含む遺物包含層、第7層と第9層は、板付I式土器と夜臼式土器の共存する時期の水田耕作土で、わずかに上器の小片を含む。第10層は夜臼式土器単純の遺物包含層で、東側に部分的に存在する。第12～13層は夜臼式土器単純の遺物包含層であるが、第12層は水田耕作土の可能性もある。第14層は夜臼式土器の時期の水田耕作土で下部に土器の小片を含む。

G-7 b 調査区は、表土より、第1層、現代の盛土、第2層、水田耕作土、第3層、水田床土、第4層、茶褐色混砂土、第5層、黄褐色粗砂層、第6層、暗茶褐色粘質土層、第7層、青灰色微砂層、第8層、青灰色砂質土層、第9層、暗青灰色砂質土層、第10層、暗褐色砂質土層、第11層、細砂層、第12層、暗黒色砂質土層、第13層、暗黒褐色粘質土層、第14層、地山の黒色粘土層、第15層、八女粘土層となっている。

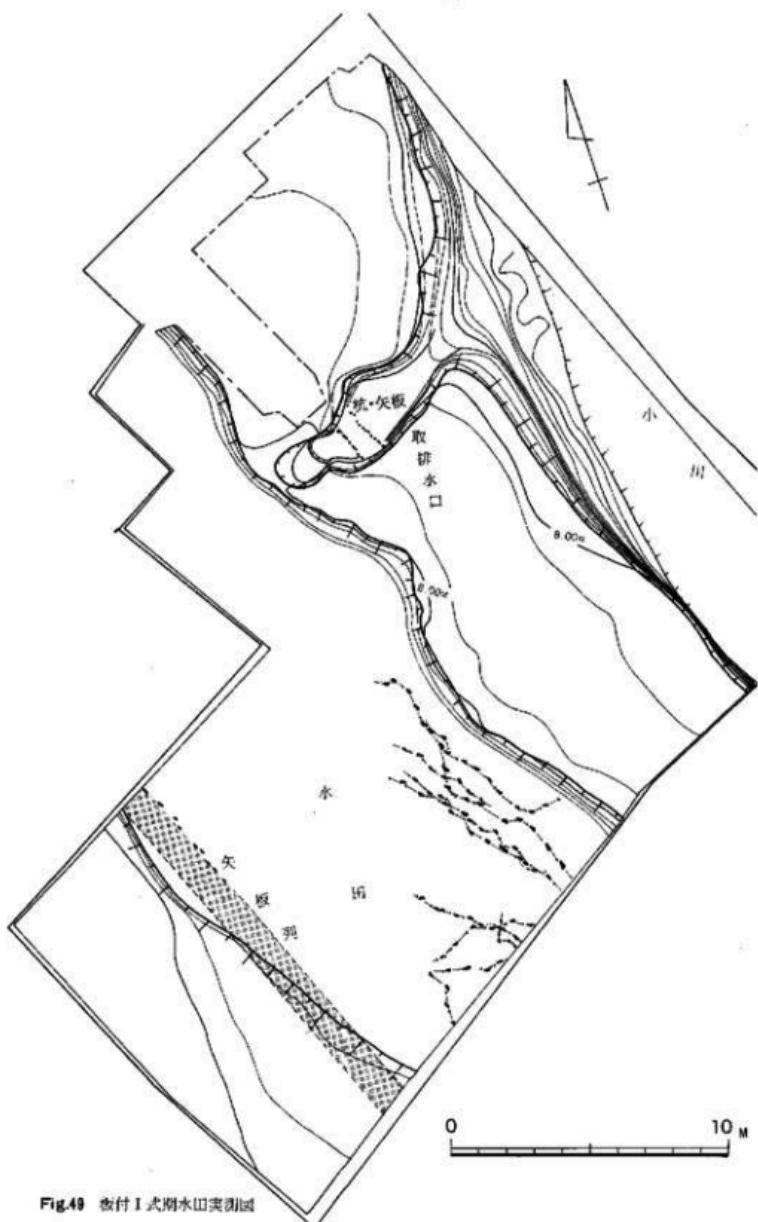


Fig.49 参付 I 式別水口実測図



Fig.50 板付 I 式期水田面(下)に残った足跡

G-7 b 調査区の層位を G-7 a 調査区の層位と対比すれば G-7 b 調査区の第 2 層は G-7 a 調査区の第 1 層、第 3 層は第 2 層、第 4 層は第 3、4 層 第 5 層は第 5 層、第 6 層は G-7 a 調査区にはない。第 7 層は第 10 層、第 8 ~ 12 層は第 11 ~ 13 層、第 13 層は第 14 層、第 14 層は第 15 層、第 16 層は第 15 層となる。

#### 板付 I 式期の水田址と付属施設 (Fig.49)

この時期の水田耕作土は一部粗砂層を介在して上、下二枚存在する。上、下の水田は 1 区画の面積の相違はあるが基本的にその構造に差異はない。水田に伴う遺構(施設)には水路(台地際を北流する小川)と、それを塞ぐ井堰、小川と水田を結ぶ



Fig.51 板付 I 式期取排水口(東より)



Fig.52 板付 I 式期取排水口(西より)

取排水口がある。小川は東側が道路敷になつていて不明であるが川幅は10mを越えるものではない。流路はやや蛇行しながら北流する。川の堆積土は粗砂と粘質土の互層で、流木、植物遺体等を多量に含む。川を塞ぐ井堰は、G-7 b 調査区において確認したもので、川に直交して多量の杭が打ち込まれている。川底部に近い部分では基礎構築として、大きな又杭を打ち込み又になった部分に横木を渡している。その後基礎部分を中心として多量の杭を幾重にも打ち込み井堰としている。井堰としてはかなりの貯水能力をもっていたと想定できる。この井堰は川の堆積に伴い補強されながら板付II a式土器の時期まで存続する。井堰周辺からは祭祀に供せられたと考える大形壺の完形品や丹塗りされた木製品が出土している。

この井堰に関連する遺構としてG-7 a 調査区に水田の水をコントロールする取排水口（溝）がある。（Fig.51・52）小川の西側に形成された高まりに掘削された溝で川と直交する。水田と小川を結ぶこの溝は長さ約9m、幅1～3m、深さ10～70cm、水田から川に向って傾斜している。溝の途中には2列の杭、矢板列が存在し、ここで水田の水量調整を行っていたと想定される。

水田面は部分的に粗砂層を介在させて上下二面存在する。それぞれの底面は洪水（出水）による砂の堆積によるもので、水田面にはこの砂に密封された多量の足跡を検出した。（Fig.50・53）足跡には歩行の軌跡が追えるものもあるが規則性はない。（Fig.49）また足跡には指先まではっきりと残っているものがあり、素足で水田にはいっていたことがわかる。

水田区画は東側が川の横に形成された高まりによって限られる。上の水田面では発掘区内に他の限界を示すものではなく、さらに広がるものと考えられる。下の水田では一部、矢板が等間隔で打ち込まれた部分があり、畦に打ち込まれた矢板とみることができる。この矢板列が西側を限る。南北の畦は発掘区内では確認できなかったが、南北に細長い水田区画が考えられる。水田1区画の広さは上の水田で18m以上×26m以上(468m<sup>2</sup>以上)、下の水田で11m×26m以上(286m<sup>2</sup>以上)が考えられる。

水田耕作土は上、下とも約10cmの厚さの粘質土層で、表面の凹凸が著しい。耕土中からは多



Fig.53 足跡石膏型

14 G-7 a, b 调查区

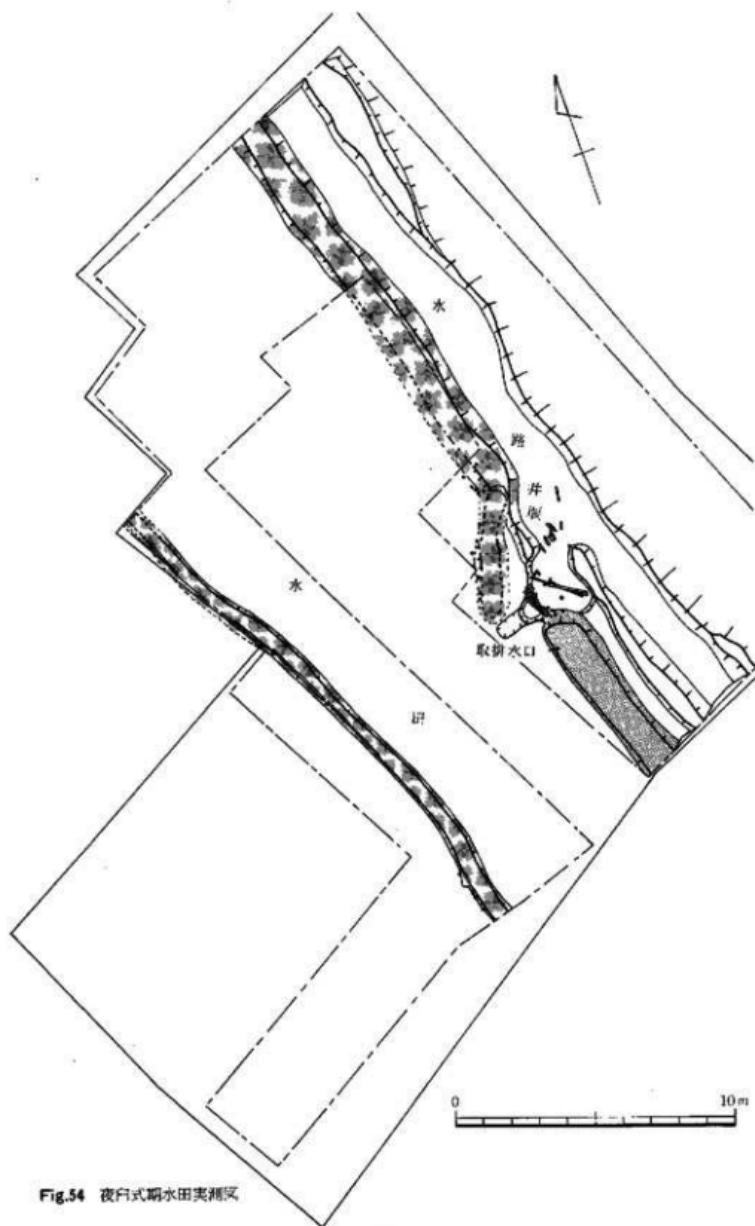


Fig.54 夜白式稻水田実測図

量の炭化米が検出できる。

#### 夜臼式期の水田址と付属施設

(Fig.54)

この時期の水田造構は最下層に検出した。水田址およびそれに付属する造構（施設）には、水路と井堰（？）、取排水口がある。水路は台地にそって人工的に掘削されたものと考えられる。幅2m、深1m、断面U字形で、ほぼ直線的にG-7a調査区からG-7b調査区に続き、水は南から北へ流れる。G-7b調査区では、溝底が段違いになり、台地上の環溝の掘削と類似する点が指摘できる。この水路はF-8c調査区においても一部確認しているので確認した長さは約110mに達する。G-7a調査区の南側でこの水路は他の平行する溝（幅1m、深30m、断面U字形）と取排水口付近で合流する。この合流点の北側に水路に直交して部分的に杭列が存在し、付近には倒れた杭が多くあることから、この地点には板付I式期と同様に井堰の設置があったものと考えている。



Fig.55 夜臼式期取排水口（上：西より、下：東より）

なお、板付I式期の水路（小川）は、この水路を部分的に破壊するが、夜臼式単純の時期に小川が存在していたかどうかについてはさだかでない。

取排水口（Fig.55）は水路の合流点、井堰のすぐ南側に設置される。構造的には、板付I式期の取排水口と同様であるが規模的には小さい。取排水口は水路にそった畦畔の一部に設置される。長さ3m、幅1mで浅い溝状になっている。溝の途中に2列の杭、矢板列があり、水田の水量調整を行っていたと考える。取排水口の北側の畦畔が屈曲し水田の内側にはいり込むが、これは排水によって水口が後退した結果おこった現象と考えている。水田耕作土は一枚で、水田耕作土の上には細砂（一部に粗砂）が堆積しており、この時期の水田の廃絶も出水によるものと考えられる。

## 14 G-7 a, b 調査区



Fig.56 G-7 a 調査区断面



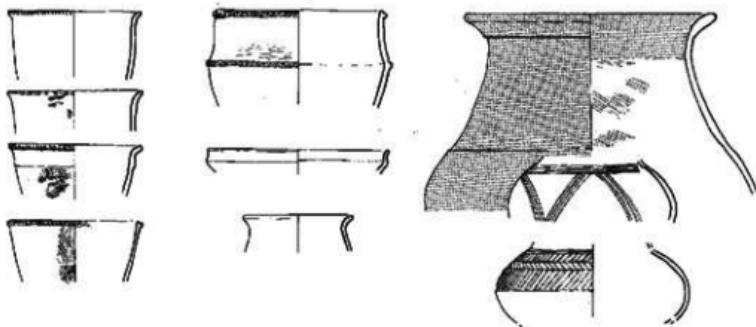
Fig.57 夜臼式期水田出土石器

水田の区画は、水路にそってつくられた幅1m、高さ30cmの畦畔によって東側を限られている。西側は幅50cmの小さい畦によって田の境が明らかである。南北の畦は不明。水路にそった畦畔は地山の黒色粘土層を混じえた土を土盛りしたものの、両側には補強のための杭、矢板が打ち込まれている。西側の畦はやはり土盛りのものであるが、細長い削板を横にわたり側面を杭で留めたものである。水田の1区画は南北が不明であるが、南北に細長い6~10m×50m以上(500m<sup>2</sup>以上)が想定される。水田耕作土は粘質土層で厚さ約10cm表面は凹凸が著しい。耕土中より多量の炭化穀穀を検出した。

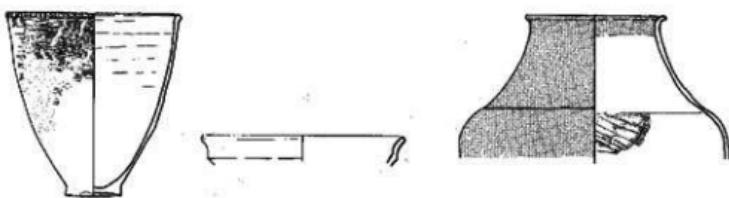
## 板付II a式期の取排水口 (Fig. 60)

G-7 a 調査区において検出した遺構で、長さ9m、幅1~2mで、西から東

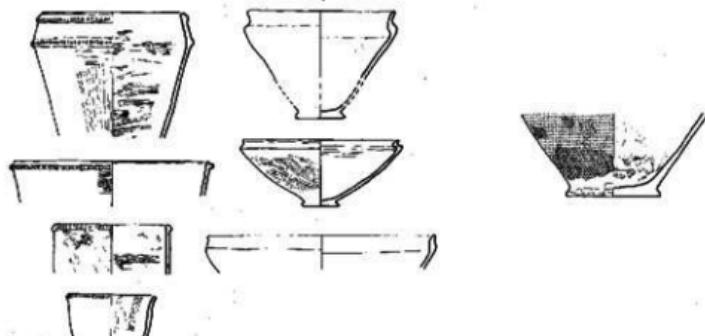
第2章 各調査区の概要



第7-9層の土器



第10層の土器



第12-14層の土器

0 30 cm

Fig.58 各層出土の土器



Fig.59  
G-7 a  
調査区全景

Fig.60  
G-7 b  
調査区全景  
(弥生式期)

Fig.61  
G-7 b  
調査区全景  
(夜臼期)





Fig. 62

G-7 b 調査区木器出土  
状況 (南より)

Fig. 63

G-7 b 調査区木器出土  
状況 (北より)

Fig. 64

夜臼式土器出土状況



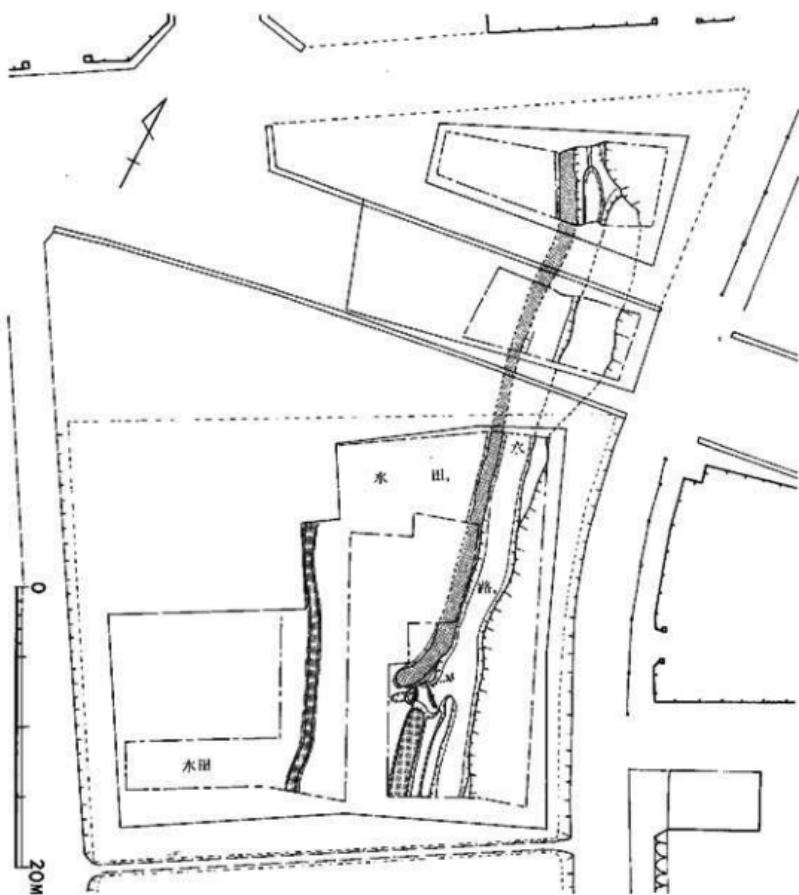


Fig.65 G-7 a, b. 堺道区の夜日式防の水田通溝の関連

に向って傾斜している。位置的には板付 I 式の持期より存続している井堰のすぐ南側に位置しており、前 2 者と同様の取排水口とみることができる。溝の途中に杭列が残存しているがその状態は良好でない。他例と同様の構造をなすものと考えている。蛇行が著しい。水田との関係は発掘区が限定されたために充分に把握できたとはいえないが、発掘区の西側のすみに、幅 70cm、高さ 5cm の咲畔らしい遺構が存在する。G-7 a 調査区では板付 II a 式土器の持期の遺は存在していないので、この持期の水田は G-7 b 調査区より以北を想定せざるを得ない。取排水口の溝の蛇行地点に大形壺 1 個が押しつぶされた状態で出土した。

以上、3 持期の水田およびそれに伴う施設は、共に初期水稻耕作についての新知見である。

## 第2章 各調査区の概要

水稻農耕が板付I式土器の時期よりさらにさかのぼり、夜臼式土器単純の時期に存在したことを実証し、さらには初期の水稻耕作の実態を明確にしたといえる。水利関係についていえば、主水路の下流を遮る井堰を設置し、貯水した水は水田と水路を連結する取排水口より逆流させ水田に入れ、水田の水は取排水口に伏設された杭列によって水量調整が行われたと想定できる。しかし、いまだ不明な点も多く今後に残された重要な課題も多い。

G-7 a, a西調査区では前述した遺構の他、出土遺物にも注目されるものがある。土器の層位的関係は、これまで不明確な点が多くあった弥生文化生成の問題に関して一步前進する資料を我々に与えてくれた。また、夜臼式単純の水田より出土した木製農具（踏手鍬1点、エブリ(?)1点、鍬等の柄3点、石斧柄1点）木製品や石窓1点の出土は、水田址、炭化米、初と共に稻作の存在を示すものであった。また、各時期の水田、付属施設に伴う土器、木製品は、その出土位置や状態から農耕祭祀に関連するものであることが想定できる。

この他、中期～Ⅳ世の遺物包含層中より銅鉢(?)鏡型1点の他、多数の弥生式土器、石器、土師器、須恵器、青磁器、木器、編物等が出土している。

日下、整理中であり、その詳細については不明なものが多く、今後の整理ではさらに新しい知見もあらわれてくるものと考えている。一日も早く本報告を草したいと考えている。

なお、水田耕上中より出土した炭化米、炭化穀は短粒であり、日本型と考えることができる。  
計測値は本概報では略した。  
(山崎純男)

## 第3章 まとめ

1977、1978年の2年度にわたる板付遺跡および、その周辺遺跡の調査は前章にその概略を記したように、15調査区について実施した。時期別には散発的に検出できる先土器時代遺物は別にして、縄文時代末期から近世におよび、全時期を含むが、特に多いのは、弥生時代の遺構、遺物である。調査が完了したのみで、整理は今後に残されているが、今回の調査で特に注目される問題点を提示しまとめにかえたい。

今回の調査で最も注目される成果として、G-7a、7b調査区の水田址の調査があげられる。水田址は約50cmへだてて二時期認められ、最下層の水田址は、夜臼式土器単純期のものである。台地際に掘削された水路、水路を塞ぐ井堰、水田と水路を結ぶ取排水口等の水田とそれに伴う付属施設が完備している。水田畔も土盛りと保強のための杭列が存在し良く残っていた。

従来から、佐賀県宇木汲田貝塚、丸山遺跡、長崎県山ノ寺遺跡、原山遺跡、あるいは熊本県ワクド石遺跡等から出土した炭化米や土器上に残された糊圧痕から、弥生時代（板付I式土器）以前に稻作農耕の存在した可能性が示唆されていたが、地理的問題、絶対年代の諸点において問題が内在しており、衆目の一致するところではなかった。しかし、今回のG-7a、7b両調査区は板付I式土器の時期より以前に水稻農耕が存在することを実証するものであった。

夜臼式土器単純期の水田は水路にそった細長い区画で、1区画は6~10m×50m以上(500m以上)の広さをもっている。同時に出土した木製農具未製品や石庖丁は水田と共に農耕の実態を良く示すものであった。耕作土中等から検出した炭化米、炭化穀は粒状で日本型と考えられるが今後の研究にまちたい。上層の板付I式、夜臼式土器共伴の水田址とその付属施設、板付II式土器の時期の取排水口は構造的には夜臼式土器単純期の水田構造を踏襲していることがわかる。夜臼式土器単純期の水田が上層の水田、付属施設と比較し丁寧なつくりであるのは、稻作伝来の時期を暗示しているのであろうか。

水田址と共に注目されるのは各層位ごとに出土した土器である。弥生文化生成の問題に関し、時間的尺度として一步前進した資料である。

従来、縄文時代晚期終末とされた夜臼式土器は、弥生時代初頭の板付I式土器と共に関係で出土し、北部九州では両者が個別に単純に出土することはなかった。また、島原半島の山ノ寺、原山遺跡では突背文土器の単純期が把握され、それらに伴い稻作、支石墓が伴うとみられていて、地域的な関係において板付I式土器との前後関係は不明確であった。

今回の調査はそれらの諸関係を層位的に明確にしたといえる。（Fig.58）その概略を示せば次のようになる。

板付I式土器と夜臼式土器の共伴する水田遺構の下に数層にわたって夜臼式土器の単純層が認められる。出土土器は砂の間層をはさんで下層と上層に大別できる。すなわち、夜臼式土器

は層位的に下層、上層、板付I式土器共伴層として分離できる。各層出土の土器の特徴を概説すると以下のようになる。

#### 下層の夜臼式土器

セットとして深鉢、浅鉢、大形壺、中形壺、小形壺がある。壺环は未発見である。深鉢は直口するものと胴部を肩曲するものの二種がある。器壁の外面に条痕が著しく（一部ケズリで消す場合もある）。突帶の刻み口も大きく深い。底部は台形状に張り出し安定感がある。口縁端部が平均にへらでケズリとされている特徴がある。条痕は横方向が大部分であるが一部縱条痕もみられる。器形的には山ノ寺、原山式と呼ばれたものも含む。浅鉢は黒色磨研のものが多い。器形、整形技術は黒川式土器のそれを踏襲している。壺形土器の大部分は丹塗り土器で、外面の全面と口縁部内側の数cmが帯状に丹塗りされたものである。一部器面に条痕を残したまま丹塗りされたものもある。中、小形壺は胎土が精良で外面はよく研磨されている。底部は台形状の平底であるが、一部、丸底に近い平底のものも存在する。

#### 上層の夜臼式土器

出土土器が極めて少いが、下層の土器とはやや異っている。出土土器には深鉢、浅鉢、大形壺がある。深鉢は底部が台形状をなさずたちあがり、板付I式土器の壺形土器の底部に近い。器壁外面に施された横方向の条痕は胴部下半をナデ消している。大形壺は器形的には下層、あるいは板付I式土器を伴うものと同じである。外面と口縁部内側を帯状に丹塗りする。内面の器面測定に刷毛目痕がみられるものもある。底部に穿孔したコシキの存在もある。

#### 板付I式土器共伴の夜臼式土器

セットとして深鉢、浅鉢、壺がある。器形的には単純層出土の十石と大きな変化はない。深鉢には直口するものと、胴部上半で肩曲する二種がある。器面剥離は条痕を施した後ナデによって消される傾向が強い。突帶の刻みは丁寧でそろっている。旗文具に特徴がある。一部、条痕のかわりに刷毛目を施すものがあり、条痕も細いものがたて方向に施されるものが多くなる。浅鉢、壺には基本的に変化がない。

#### 板付I式土器

従来の板付I式土器である。壺、壺がある。不明確であった大形壺の存在を確認した。壺の丹塗りは夜臼式土器と同じである。彩文土器が多い。

以上が層位と土器の関係であるが整理途中であるため充分な把握ができていない。正式報告において詳細に検討を加えることとする。予測的にその変遷をみると夜臼式土器の変化の中から板付I式土器が生成される可能性が強いが、その要因は北部九州ではなく、他の地域からの影響が予想される。下層の夜臼式土器の時期にはすでに大形の壺が存在し、繩文式土器のセットの中に突如として大形壺が出現するようであり、大形壺の存在が稻作開始と不可分の関係にあったことが推測できる。弥生文化生成の過程は複雑で、数次におよぶ、外的要因を考慮する必要があるかも知れない。

以上の稻作農耕の起源にかかるG-7a、7b調査区の外、注目すべきものとして、台地

### 第3章 まとめ

上の調査区より検出した井戸があげられる。弥生時代の井戸に限定すれば、F-5 a 調査区に1基、F-5 c 調査区に3基、F-6 b 調査区に1基、F-7 b 調査区に2基の計7基の井戸を調査した。時期的には弥生時代中期～後期におよぶものである。

板付北台地からは、昭和26年の日本考古学協会の調査以来、現在まで約20基の井戸が検出されている。台地が大々的に削平されていて、集落構造の明らかな板付遺跡において、井戸の分布が集落の変遷を知る上で大きな意味をもつ。現在までに確認した井戸の時期別の分布には一定のまとまりがあり、今後の検討によって集落構造、変遷が把握できるかも知れない。

また、これらの井戸の底には完形に近い土器が一括して埋没していることは間違いない、この土器群が水(井戸)の祭祀行為に使用されたことは想像に難くないが、この一括土器は縦年資料としても大きな価値をもつ。中期～後期の土器縦年は不明瞭な部分が多く、今回調査した井戸の一括土器はこの間を埋める縦年資料として好材である。

以上、代表的な問題点について概略を示したが、整理終了後の正式報告書において詳細な検討を加えたいと思っている。

(山崎紘男)

---

---

福岡市  
板付遺跡調査概報  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集  
1979年3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 福岡印刷株式会社  
福岡市博多区東郡町1丁目10番15号

---

